

演劇創造

復刊

第135号

(第51巻 第2号)

平成28年(2016年)11月15日発行



—— 発行 全国高等学校演劇協議会 ——

〒270-0025 千葉県松戸市中和倉590 千葉県立松戸高等学校 TEL(047)341-1288 FAX(047)346-4002

事務局長 阿部 順

ホームページ <http://koenkyo.org/> メール info@koenkyo.org

第62回大会審査の経過

第62回全国高等学校演劇大会は、71回目の原爆忌を間近にした広島「JMSアステールプラザ」を会場に、8月1日（月）～8月3日（水）に行われました。

今大会の専門審査員は、舞台美術家として劇団四季の数多くの作品の舞台美術を担当し、ミュージカル等幅広い分野で国内外において活躍されている土屋茂昭先生、劇作家として劇団☆新感線で物語性を重視した作品を多く生み出してきた中島かずき先生、演出家としてさまざまな分野の作品を手がけるとともに、ワークショップ講師として学校等の教育機関、地域コミュニティで幅広い年齢層の人とともに演劇を創造してきた森さゆり先生、そして今回新しい視点から高等学校の演劇活動を今までとは違った立場からとらえてみよとする立場から、衣裳プランナーとして活躍中の加納豊美先生、の4名の方々をお願いいたしました。顧問審査員は、北海道ブロックから米永道裕先生、東北ブロックから安保健先生、近畿ブロックから井口守先生と、いずれも全国大会等で演劇に取り組むことの意味を考えさせてくれる作品を数多く発表してこられた3名の先生をお願いいたしました。

1日目の上演終了後、審査の進め方、方向性について確認しました。2日目はそれに沿って、幕間も含め多くの時間を使って作品の講評を行い、上演終了後の夜間には、審査会を実施いたしました。そして3日目のすべての上演が終了したところで、最終的な審査を行いました。

まず優秀賞対象として、得票数の順に4校を絞りました。票の集中した学校があり、それをふまえて最優秀校と優秀校の審査について議論を進めました。

青森中央「アメイジング・グレイス」については、外に向けて全員で作ることを共有していることの素晴らしさ、アイデアがあり、役者がよく訓練されていること、舞台の奥行きを使い方、歌い方等のうまさ、演出様式と衣裳の合致等が評価されました。

伊東「幕が上がらない」については、客席を舞台にする「コロンブスの卵」的な発想の確信犯のおもしろさ、上演空間に対する積極性を考えてアプローチし、きちんと演出されていること、寺山修司の演劇を彷彿とさせるような、挑発的な演劇であること等が高く評価されました。

岐阜農林「Is（あいす）」は、舞台上の人たちが楽しんでやっていてそれが伝わってくることのすばらしさ、バスケットボールとイチゴ作りをうまくつなげ、「それもあるよね」と思わせるしっかりとした作品の作り方、身体性、舞台美術等の総合力等が高く評価されました。

芸術総合「解体されゆくアントニン・レーモンド 建築旧体育館の話」については、台本選びの過程でやりたい作品を選び、それをここまで仕上げてきたことの素晴らしさ、基礎訓練がきちんとなされていること、説明セリフがなくても、舞台の変容がきちんと伝わってくること等が評価されました。

幕間にも白熱した作品をめぐる議論がなされましたが、講評会では、「熱いうちに作品をとらえる」場面と、全体を通して「冷めたところで俯瞰する」場面とが、うまく融合した審査講評となりました。今大会の上演作品は、開催地の意味を踏まえながら地元広島から2校が出場したほか、今までにない表現に挑戦した学校、少人数でも表現の可能性を伝えてきた学校と、さまざまでした。その意味で、参加者が多様な作品と向き合い、さまざまな見方を探るよい機会となったと考えます。

舞台美術賞については、4校に評価が分かれていましたが、舞台装置の配置構成のうまさ、間接光の効果を取り入れながらうまく表現していること等が評価された舟入が、創作脚本賞については、人間関係の下手な2人の関係性をドラマとして真面目に丁寧に、生徒たちがつくってきていることを高く評価して全員一致で串本古座「扉は開く」の作者出口耕士郎さんと藤井良平さんが、そして内木文英賞については、広島でやる意味として語り継がなくてはならないものに取り組むことを評価して沼田が、それぞれ受賞しました。

舞台を作るためには身体性、発声法、表現力といった日ごろからの基本的な訓練も重要です。しかし、脚本選びに始まりそれを自分たちのものとして仕上げていく演出力、それとうまく絡んでいく舞台装置、照明などのスタッフワークと、総合力としての演劇の芸術性についても、今後考え続けていくことが大切だと考えさせられた今大会でした。
(事務局 三上 実・杉内 浩幸)

- | | |
|--|--|
| <p>【最優秀賞（文部科学大臣賞・全国高等学校演劇協議会会長賞・東京演劇大学連盟賞）】
岐阜県立岐阜農林高等学校
岐阜農林高校演劇部／作『Is（あいす）』</p> <p>【優秀賞（文化庁長官賞・全国高等学校演劇協議会会長賞）】
(上演順)
青森県立青森中央高等学校
畑澤聖悟／作『アメイジング・グレイス』
静岡県立伊東高等学校
伊東高校演劇部・加藤剛史／作『幕が上がらない』
埼玉県立芸術総合高等学校
オノマリコ／作『解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話』</p> <p>【優良賞（全国高等学校演劇協議会会長賞）】 (上演順)
広島市立沼田高等学校
黒瀬貴之／作『そらふね』
北海道北見北斗高等学校
北見北斗高校演劇部・新井繁／作『常呂から TOKORO curler』</p> | <p>広島市立舟入高等学校
周防柳／作 須崎幸彦／脚色『八月の青い蝶』
北海道清水高等学校
北海道清水高等学校演劇部／作『その時を』
佐賀県立佐賀東高等学校
いやどみ☆こ〜せい・佐賀東高等学校演劇部／作『ボクの宿題』
徳島県立阿波高等学校
よしだあきひろ／作『2016』
和歌山県立串本古座高等学校
出口耕士郎・藤井良平／作『扉はひらく』
山梨県立白根高等学校
河野豊仁／作『双眼鏡』</p> <p>【舞台美術賞】 広島市立舟入高等学校『八月の青い蝶』
【創作脚本賞】 出口耕士郎・藤井良平『扉はひらく』
【内木文英賞】 広島市立沼田高等学校</p> |
|--|--|

第62回全国高等学校演劇大会（広島大会）上演・審査記録一覧

月日	上演順	ブロック	学校名	作品名	作者	創/既	土屋	中島	森	加納	米永	安保	井口	計	
8月1日(月)	1	広島	広島市立沼田高等学校	そらふね	黒瀬貴之	創作									優良
	2	東北	青森県立青森中央高等学校	アメイジング・グレイス	畑澤聖悟	創作		○	○	○	○	○		5	優秀
	3	関東(南)	静岡県立伊東高等学校	幕が上がらない	伊東高校演劇部・加藤剛史	既成	○	○	○	○	○	○	○	7	優秀
	4	北海道	北海道北見北斗高等学校	常呂から TOKORO curler	北見北斗高校演劇部・新井繁	創作									優良
8月2日(火)	5	中国	広島市立舟入高等学校	八月の青い蝶	周防柳／作、須崎幸彦／脚色	創作	○								1 優良
	6	中部日本	岐阜県立岐阜農林高等学校	Is（あいす）	岐阜農林高校演劇部	創作	○	○	○	○	○	○	○	7	最優秀
	7	北海道	北海道清水高等学校	その時を	北海道清水高校演劇部	創作									優良
	8	九州	佐賀県立佐賀東高等学校	ボクの宿題	いやどみ☆こ〜せい・佐賀東高校演劇部	創作									優良
	9	関東(北)	埼玉県立芸術総合高等学校	解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話	オノマリコ	既成	○	○	○	○	○	○	○	7	優秀
	10	四国	徳島県立阿波高等学校	2016	よしだあきひろ	創作									優良
	11	近畿	和歌山県立串本古座高等学校	扉はひらく	出口耕士郎・藤井良平	創作							○	1	優良
	12	関東(南)	山梨県立白根高等学校	双眼鏡	河野豊仁	既成									優良



広島市立沼田高等学校



青森県立青森中央高等学校



静岡県立伊東高等学校



北海道北見北斗高等学校



広島市立舟入高等学校



岐阜県立岐阜農林高等学校



北海道清水高等学校



佐賀県立佐賀東高等学校



埼玉県立芸術総合高等学校



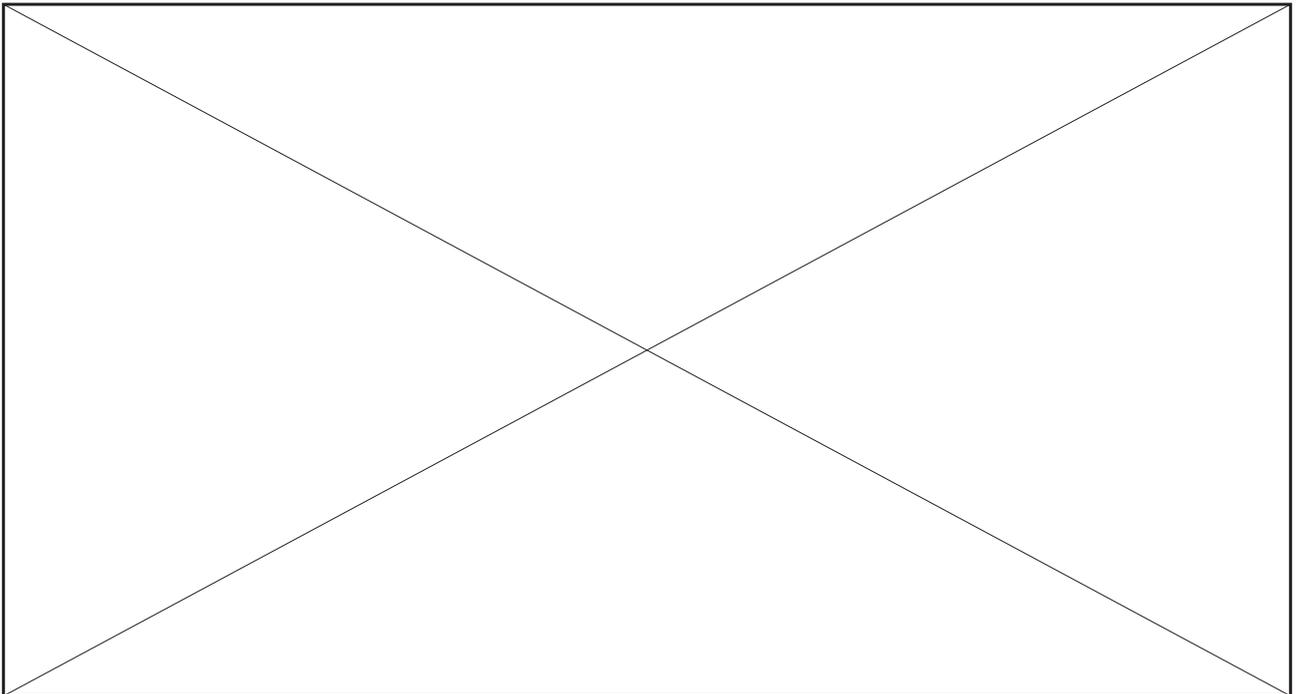
徳島県立阿波高等学校



和歌山県立串本古座高等学校



山梨県立白根高等学校



「まだまだ熱い広島です」

松本 誠司

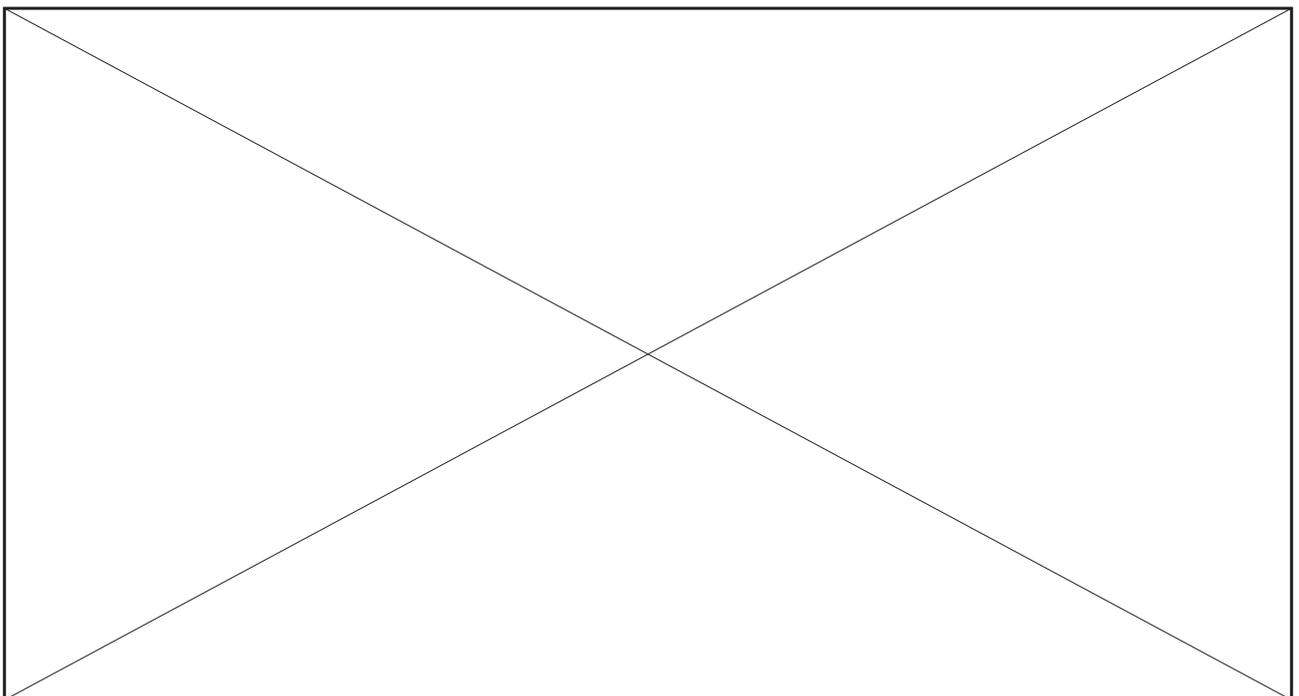
第62回全国高等学校演劇大会（第40回全国高等学校総合文化祭演劇部門）に出場された上演校の皆様、会場に足を運んでいただいたご来賓、観客の皆様、全国高等学校演劇協議会事務局の皆様、理事の皆様、その他関係者の皆様、大会期間中は多くの方々にお世話いただき、本当にありがとうございました。広島大会を無事閉幕することができました。運営スタッフ一同、心から感謝しております。まずは御礼申し上げます。

今回の広島大会について、いろいろな方からお褒めの言葉をいただいております。「広島らしい熱さが出ていた」という最上のお言葉をいただき、身の引き締まる思いです。ああ、よかった、と言えることの幸せ。入場前の観客の皆様が果てしない列を作り、それが乱れていく夢まで見ていたのですから。一番の悩みだった観客の皆様を会場に収容しきれないという問題も、なんとかクリアできました。ハガキ申し込みの段階でお断りした方も多く、それでも客席不足が予想されましたが、当日申し込みハガキなしで来られたお客様にも、サブモニター会場を含めて観劇していただきました。最終日まで常に満席の大盛況。ホッとしました。

もちろん反省すべき点は多々あります。サブモニター会場にパンフレット等の資料を配置していなかったことで、上演初日から「どうした、広島！」というお叱りの言葉をいただきました。期待されているからこそその言葉です。大会を成功に導くには、様々な部分での想像力を働かせねばなりません。来賓指定席の確保、生徒の交通費問題、弁当予算オーバー問題、IDカードの不足問題、運営マニュアル編集等々、いろいろ想像力を働かせてきましたが、想像を超える局面は初日からすぐに出てきました。そこでいかに即時対応するか、チームとしての機動力が試されます。慌てず対応、謝ってご了解いただきました。初日にばたついていた部分は徐々に解消され、運営はだんだん波に乗っていきました。これも事前準備段階で大会運営への気持ちを作っていたからこそその結果です。3月以降、顧問は2週に1度集まり、延々と打ち合わせを続けました。その結果、顧問全員で生徒たちと気持ちをひとつにしていくことができたように感じています。

さて、あっという間の3日間、祭りは終わりました。この高揚感をどうやってずっと続くエネルギーに変えていくかが次の課題です。生徒の人生が少しは変わったのか、大会を通して心は揺さぶられたのか、学びの場であったことは確かです。学んだからには、新しいことへと踏み出していかなければなりません。顧問・生徒の一体感、高揚感が今後の活動へとつながっていくことに期待しています。まだまだ「熱い」広島です。

最後に次年度の宮城大会の大成功を祈念し、お礼の言葉とさせていただきます。広島大会にかかわっていただいた皆様、本当にありがとうございました。（第40回全国高等学校総合文化祭演劇部門 部会代表）



「広島大会を終えて」

河野 隆史

今回の2016ひろしま総文は大成功を収めることができました。これは、全国高演協やアステールプラザのスタッフの方々、先生方や生徒実行委員、そして出場校の皆様と会場に来てくださったお客様、多くの方々の支えのおかげです。大会を終え、肩の荷が下りた気持ちでちょっぴりホッとしています。

私が初めて総合文化祭に触れたのは、今大会の視察のために赴いた茨城大会でした。そこでは、生徒をはじめとした大勢の方々が、手と手を合わせて大会という一つの作品を作り上げており、その姿にただ感嘆するばかりでした。その時私には、絶対に素晴らしい大会にしてみせる！という意気込みと、その裏で本当にできるのか？という不安との二つの気持ちが芽生え、初めて大会というものを近くに感じました。

広島大会が近付くにつれて実行委員の仲間も増え、何度も実行委員会を重ねて経験を積んでいくと、自信のようなものが生まれてきました。すると不安も薄れ、素晴らしい大会にするという一つの目標に突き進むことができました。これは共に悩み、共に歩んでくれた広島地区の演劇部の皆様のおかげです。

大会前日の交流会では、出場校の皆様の協力的なノリのおかげで過去最大級に盛り上がったのではないかと思います。「おもしろかった」「楽しかった」という皆様の言葉がとても励みになり、出場校の皆様のあたたかさを感じることができました。その後迎えた大会当日、どんな夏よりも熱い上演のおかげで大会はますます熱を帯び、初めから終わりまで最高潮の盛り上がりで終わることができました。

会場の皆様と一体となって作り上げることができた素晴らしい大会に実行委員長として関わったことは、私にとっての大切な思い出であり、決して消えることの無い財産です。本当にありがとうございました。

来年、宮城県で開催されるみやぎ総文2017。ひろしま総文の終わりを始まりに、かけがえのない夏になるよう頑張ってください。応援しています。

(生徒実行委員会委員長 広島市立沼田高等学校)

たくさんの人に支えられた5日間

池藤 美波

全国大会の2日前から研修が始まり、広島に各ブロック代表の講評委員15人。お互いのことがよくわからないため、初めはぎこちなかった討議が次第に熱のある充実した内容になっていきました。

私たち生徒講評委員は全国大会で上演された12本の劇を観て幕間に討論をし、講評文にまとめました。討論では、どのように感じ、なにを得たか、上演校は何を伝えようとしたのかなど、各校の上演について考えます。15人が同じ意見を持つことはないので、自分ひとりでは見ることのできない新たな視点を発見することができました。その討論を講評文にまとめる作業に苦戦しましたが、劇を観ていない人にもその作品の魅力が最大限講評文を読むことで伝えられるように講評委員全員で頑張りました。

講評委員長を務めさせていただいた私は全体講評を担当しました。全体講評は、今大会で上演した全作品についてまとめるもので、大会全体を通してどうであったかについて大会最終日に発表しました。発表前にはとても緊張していましたが、「あなたの後ろには14人の講評委員がいる」という顧問の先生の言葉に支えられ、無事に発表を終えることができました。

この5日間で講評委員としてだけではなく、人としてもとても成長できたと思います。全国から集まった演劇が好きで高校生活と共に活動することで、今まで持っていなかった視点をもつことができ、多くの仲間をもつことができました。また、先生方や補助役員の生徒さん、公開討論を見守ってくださった方々、講評文を手にとったすべての皆さんに支えられ活動することができました。

私は昨年の滋賀大会から二度目の参加をさせていただきました。二度も素晴らしい仲間たちと素晴らしい劇について討論できることはとても恵まれることであると思います。たくさんの方々の協力によって、私はこの活動ができたのだと深く感じる5日間でした。本当にありがとうございました。たくさんの方々との出会いに心から感謝します。

(生徒講評委員長 広島県立福山誠之館高等学校)

演劇の面白さを改めて知った三日間



中島かずき

初めての高校演劇全国大会。

今から何が見られるのか、どこ
かうきうきした気分です席に着いた。

そしてその期待は間違っていなかった。各校それぞれ方向性こそ違え、舞台表現の豊かさに舌を巻く事が多々あったのだ。

特に伊東高校の『幕が上がらない』には度肝を抜かれた。幕を上げずに芝居をするという噂は小耳に挟んではいたが、想像以上に挑戦的で前衛的だった。客席全体に役者をちりばめ縦横に駆け回り、自分たちの状況への不満不安中途半端に何も無い事への絶望とささやかな希望を客席も巻き込みスケッチしていく。この世代の渾沌を渾沌のまま打ち出しながらもその渾沌はどこか見ている者に「そうだな」という共感を与えるし、実はその表現は結構洗練されていたりする。全く侮れない。舞台の上だけじゃない。君達にとっては会館すべてが劇場だった。特に客席の真ん中で一人、生理の話を堂々とぼやき続ける永田莉子という女優の存在感には感心させられた。これが演劇なのかと問われたらこれも演劇なのだと思わず答えられる。寺山修司などのハプニング劇など前例はいくつもある。それを知ってか知らずかぬけぬけとやっけてのけるその胆力に舌を巻く。高校生にしかできない演劇が高校演劇だが、高校生にしかできないにも程がある。この瞬間にしか描けない煌めきは今思い出しても強く心惹かれるものがある。

青森中央高校の『アメイジング・グレイス』は、堂々たる王道の高校演劇だ。おそらく部員の大半が舞台上に立ち、それなりの役割を担っているのだろう。物語も機知に富み、役者もよく訓練されていた。鬼ヶ島の鬼と人間の関係、被害者と加害者、差別と被差別が状況によりスルリと入れ替わる様子をうまく描いている。非常に楽しく後半を息を詰まらせて見た。ただ、ラストが、鬼も人も死でしか理解し合えないという諦念に見えたのは寂しい。そう感じたのは僕だけだろうか。

岐阜農林高校の『Is (あいす)』は、バスケットボールという題材、しかもバスケの天才少女が転校してくるといった漫画的な設定を舞台の上で成立させ

られるかどうか肝だぞと少々意地悪な気持ちで見始めたのだが、冒頭のバスケシーン、ボールは無対象でマイムで描かれる試合展開の中、ゴールを決めた瞬間ネットが揺れるところで「やられた、OKだ」と思わされた。これはバスケの舞台表現の発明だ。マイムとはいったがバスケシーンは実戦さながらによく動く。高くジャンプしフェイントをかましドリブルで走る。この場面だけでどれだけ練習したのだろう。こういう漫画的な設定を成立させるにはどれだけ肉体的な説得力があるかだ。岐阜農林の面々はそこに真っ向から挑み、ごまかしがない。だから鉄の重りをつけたライバルの美少女プレイヤーなど次々に過剰なキャラが出てきても面白がれる。農業高校であることの辛さ、初々しい恋愛など語りた要素を巧みに語る脚本も装置の使い方もうまく、終わった時に素直に「面白かった」と拍手喝采が送れるエンターテインメントに仕上がっていた。

芸術総合高校の『解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話』は、演技、美術、照明と隅々まで美意識が行き届いているのに感心した。女子大の四年間の脆く繊細な情感と、永遠ではなくいずれ終わる時間への哀惜が描かれている。充分におとなびて見えた役者陣が、舞台が終わると年相応の高校生に戻るところもよかった。自分に寄せるのではなくきちんと役柄を演技していた証だ。高校演劇というよりもひとつの舞台成果として評価している作品だと思った。

最優秀には、一瞬の煌めきに頂点をとる思い僕は伊東高校を推したが、話し合いの末、総合力で勝る岐阜農林になった。それも当然の結果だと思う。

以上、上位4校の感想をまとめたが他の高校の感想や気になった点を。

広島代表の二校はどちらも原爆を扱っていた。語り継がなければならないという意志を継続させていくその姿勢に頭が下がる。沼田高校の『そらふね』は戦後すぐの姉妹を描く。「明日もごはん炊こう」というのはとてもいい台詞だ。その台詞が劇中劇でもうまくリンクできればラストに向かってもっと求心力が持てたのにも思う。舟入高校の『八月の青い蝶』は昭和20年8月の広島を舞台に、少年の年上の女性への恋慕というテーマを、美しい照明と計算されたセットで切なく描いた。高校生としては、かなり背伸びを強いられる作品だが、原爆投下の瞬間

を静謐に描いたのが印象的だった。

スポーツを題材にしているということでは、北見北斗高校の『常呂から TOKORO curler』のカーリングと清水高校の『その時を』の野球もそうだ。

常呂という町で実際にカーリングを普及させた人物がいたという着眼点は面白い。ただ、物語は父と娘の相克と和解が中心となり、「なぜカーリングなのか」が伝わらなかったのが惜しい。清水高は、廃校になる田舎の高校に美人の転校生がやってきて色めき立つ男子生徒という設定が中心だ。エネルギーを持って余す男達の描写にはいくつも面白いものがあったが、後半の肝になる野球（とソフトボール）のシーンを、肉体的表現としてもっとしっかり見せて欲しかったと思う。

佐賀東高校の『ボクの宿題』は、さすが強豪校。よく訓練された役者達がパワフルに動く。主人公であるボクの宿題がいつしかダメな父親の問題だとわかって行く過程は考えられていると思うが、肝心の母親像がどこかステロタイプだったりして、頭で書いた脚本に見えてしまったのが残念だった。

阿波高校の『2016』。学校の片隅を舞台に、昭和の高校生が語る2016年と今の2016年を描くことで、10代の彼らが上の世代を撃つその試みはとても野心的だ。ただ、稽古が足りていないのか台詞が聞きづらいところも目立ってしまった。

部員の少ない学校も頑張っている。白根高校の『双眼鏡』は一人芝居。60分間を一人で引き受ける覚悟が素晴らしい。装置もよく考えられている。串本古座高校の『扉はひらく』は二人芝居。学校の中で仲間達に無視されたくないと同回り気味の男と既に孤立している男が乗り合わせたエレベーターが止まってしまう。シビアではあるが役者二人が稽古で磨き上げながら作っていったドラマは、簡単に「人はわかり合えるし変われる」という結論にはならず、でも絶望もしないギリギリの所に着地する。演者二人の佇まいも含めて、誠実で愛おしい舞台だった。

プロだろうがアマだろうが、大人だろうが高校生だろうが、舞台の上で表現されることがすべてだ。それがこちらの心をどう震わせてくれるか、それだけだ。少々疲れた物書きに改めて「舞台って面白い」と思わせてくれた三日間だった。ありがとう。

(劇作家・脚本家)

拍手喝采

森 さゆり



休み時間も何のその、

審査員室では、熱く創造と愛にあ

ふれた《講評》《対話》が、正直に率直に毎時間されました。

劇場も、審査員室も、燃えていた3日間。

『そらふね』沼田高校

繊細に丁寧な、作品に向かう心が分かります。

美術・小道具は、小さく暖かな我が家を、

そして、夏という季節を現出しています。

ただし、場転がおいしい。

例えば、幕開き後、最初の暗転（場転）。

照明が入ると同時にカットインでSE蝉が、ミーっ！と入る。など、意図的な創造を場転にも。

場転は物語の、舞台のリズムをつくります。

そして、演技について。全体的に『どこかで見たことのある…』になってしまった事がおいしい。

丁寧すぎた結果とも言えるかな、と。

素直さ柔軟さを、その丁寧さ故に加味できていると思っています。

『アメイジング・グレイス』青森中央高校

素晴らしかった。面白かった。

バカバカしいことを、真面目に成し遂げる。

そんな、人間としての喜び溢れた舞台だからこそ、

絶望は祈りなのだと気付かされました。

高校演劇でしか出来ないこの舞台。だからこそ、二度と無い時間というものを感じられました。

高校演劇の弱点を強みにしているということにも感心です。そしてこの実現は、訓練された心身だからこそ。

このチームにしか創造できない世界観が、チーム全体で共有され昇華された舞台となっています。

『幕が上がらない』伊東高校

面白い。

これもまた、高校生にしか出来ない舞台であり、舞台の根源に向かわされた舞台。

舞台上以外が舞台。という発想の素晴らしさ。
目の前に観客がいる状況での集中力のある演技。
公演毎に変わっていくテキスト。

そして、たった今ここにいる、この出演者でしか出
来ない。という演劇の根本も示していました。

観客席で私は『今、この瞬間ここにいる自分が幸せ』
という、演劇にとって一番の幸せを感じていました。

『常呂から TOKORO curler』北見北斗高校

真面目に、丁寧に取り組む姿勢を感じます。
舞台空間を3つに分けることで、観客に分かりやす
く美しく空間を伝えていきます。

もったいないのは、時おり都合よく世界が歪むこと。
例=ひとりでに襖が開く。

世界観の突き詰めを、次回は是非。

そして役柄の事。自身の年齢や立場と離れた役柄を、
自身のことにする。そんな挑戦を次回は是非。

演劇の楽しさは、人間が生まれる事、関係がつなが
り、人生が紡がれることだと思っています。

ラストの美しい景色が創れるチームだからこそ、そ
の先に期待を！

『八月の青い蝶』舟入高校

きれいな舞台でした。

美術=真中に高台を置く事で、上下を美術装置空間
の中に組み込むことに成功しています。その高低差、
奥行きを存分に発揮した物語の進行（場転）は、観
客を引き込みます。

演技・進行について。これは『好み』かもしれませ
んが、間を凝縮されると、もっと濃密さが増したよ
うな思いがします。しかもスピード感の有る。

ト書きの『これを高校生に望むのかっ！』様々に、
志の高さを感じます。

そしてその志に、舞台は応えています。

『Is (あいず)』岐阜農林高校

いやもう、やられました。凄い。

バスケットを舞台で成立させる。

ダンスでなく、実際として成立させる。

真っ正面からの気持ち、創意工夫、その実現の為の
稽古量、その全てに拍手喝采。

ただ一点お伝え『話し方の事』。少年に代表される
ように、語尾を強調する話し方が、このチームの癖
としてあります。直せると、より表現は広がります。
お伝え事は以上。

スピード感のある、熱い爽やかな高校青春ドラマを、
どストレートにやりきる清々しさ！

高校演劇ここにあり。見事。

『その時を』清水高校

愛おしい作品。

男子のバカさ可愛さ。女子の優しさ強さ。

幕開きの躍動感！

自転車からの、全員ズキュンっ！

それだけに、そのあとの失速がもったいない。

演出家（観客の視点）の不在を感じました。

演技、素敵です。素直にその人物としてそこにいる。

例=『おばあちゃん』が、『おばあちゃん』という
記号でなく、『花ちゃん』という一個人でした。

素敵台詞随所！『次、17になる時はいつ』『ないよ』

『振られたこともないんだろ、寂しい青春だ』

次回、『演出』という考え方を是非。

『ボクの宿題』佐賀東高校

工夫されたシーン・景色が散りばめられた舞台。

しかし、この物語には話し合いが無い。

『話し合いが無い』ということを実感している物語
ならばよいのですが。

演劇というのは、言葉のドラマです。

映像ドラマと違う素敵な特徴の一つに、言葉の多さ
があります。

『話す』ということ、『聴く』『伝える』というこ
とに、繊細に丁寧になれることが演劇の素敵な特徴の
ひとつだと思っています。

シーン・景色としての綺麗さ工夫は、全体に散りば
められています。見せ方の視線（演出力）を持って
いるチームの、この次が楽しみです。

『解体されゆくアントニン・レーモンド建築

旧体育館の話』芸術総合高校

うつくしく清らか。そして艶かしい。

感覚的センスと、既存台本2時間あまりを半分にカッ

ト出来る言語理論的センス。
何が自分たちに相応しいのか、探し選び取れる賢さ。
それを実現する丹念で繊細な稽古の積み重ね。
上演直後の号外に『芝居途中、伸びていることに気づきスピードを増した』と掲載されていました。驚愕しました。その冷静さに、それが実現できるほどの稽古量に。

時間を気にすることは良い事です。凝縮されたスピードと緊張感が生まれました。

ト書きにも脱帽。『いのち短し恋せよ乙女…』ただ唄うことで作家の意図を表現させる見事な演出でした。

プロデュース力、演出力のある見事な舞台。

『2016』阿波高校

力強く奥行きのある美術、小道具の計算された配置。存在感のある舞台空間です。

これほどの空間を創ることが出来るチームだからこそ、人間の造形に期待したい。

出来ると思うからです。

先ず最初の出発は、自分自身。

自分の演じる、その役の人物は本当に生きているか。自分自身のように、泣き笑い悲しみ喜ぶ感情は動いているのか。

役柄=他者を生きる力は、何より最高の想像力=思いやりへとつながる。

演劇の力、存分に！

『扉はひらく』串本古座高校

二人が出会えて、二人がつくった。

熱く繊細。真っすぐさに心動かされます。

二人だけで、この広い舞台をどうするのだろうと思っていたら、照明による空間の移動。

大きな教室から、エレベーターの密室へと、二人の心の距離が視覚化される見事な演出。

おいしいのは、幕開きあたり。感情の説明の為に感情を動かしていた事。

パニクるのも爆笑も、結果そうなたただけ。

それが目的ではないのです（それが目的のもありませんが、今回は別の話し）。

しかし、終幕が近づくにつれ、それも無くなり、繊細に互いを感じとろうとする二人がそこにいました。朝日が私にも見えました。

『双眼鏡』白根高校

ひとりで、よく戦いました。

揺れている時計が意図的に見えるほど、ひとりの戦いは過酷なはずでした。

その戦いを支えた美術、音響が巧みでした。

祭囃子、うすく流れる音楽、大時計の仕掛け。

沙織の前にある立方体、しばらくどかさないのも良い。

台詞「100年後ここにいる人は、みんな死んでいる」景色のうつくしさ（膝を抱えるひとりの少女）と重なって、この孤独と安心に震えます。

ただしかし、ひとりの少女は、しっかりしすぎました。残酷な言い方でごめんなさい。

公演を重ねる中で、初演近くの繊細な不安感といったものが、気付かず失われていったのかもしれませんが。不安なままは不安ですから。

それと向き合う、ひとり芝居の舞台。

そのチャレンジに、拍手喝采。

全国高校演劇大会 広島

拍手喝采、おくり続けた3日間。

この先にも、おくり続けます。

この先、高校を卒業して先、

演劇を舞台を、生業にしようがしまいが、演劇をした高校時代は、生きる力を、生きる楽しさを培う時代となるはずだ。

私は、そう思って演劇をしています。

広島に参り、私も培わせていただきました。

ありがとう。

拍手喝采、その人生に。

(演出家)

高校演劇の多様性を感じて



土屋 茂昭

広島大会は8月6日を控え、ヒロシマを強く意識しないわけにはいかない大会でした。そして、上演作品も稀に見るベクトルの異なる質の高い作品が、演劇の多様性を私たちの前に示す大会であったと思います。

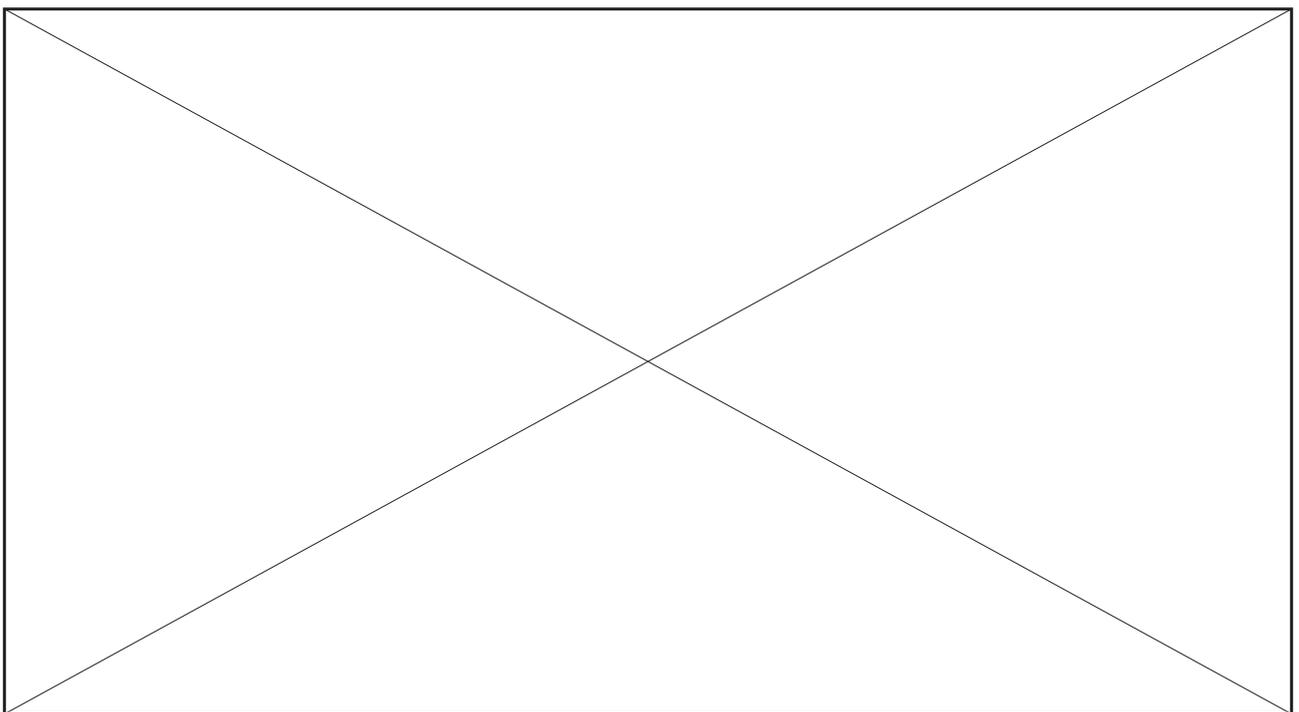
広島市立沼田高等学校『そらふね』 原爆後のバラックを簡素で粗末だが生活感のある装置と小道具で表現している。船を意識したという少しずつ色の違う横板目の壁面。箱舟をも連想させる装置の上辺が一直線なのは違和感があるが、ご飯の炊き方の台詞に込められた生きる居住まいを感じさせる空間。そらふねシーンは、座敷と地舞台を使い分けて構図を作っているが、絵本の中のイメージとしては照明が平板。時間経過を含む暗転中の工夫も欲しい。出演者の声がクリアーに客席に届いていた。**青森県立青森中央高等学校『アメイジング・グレイス』** 地明かり黒袖、黒文字のいつものスタイル。いつものスタイルだが出演者達の身体表現のクオリティーに感心させられる。テンポと表現の巧みさも素晴らしい。白いTシャツの人間と赤いTシャツの鬼の表し方は上手く数の論理の怖さを観客に視覚化させている。演出技法と論理の先にある感動には少し物足りなさも感じる。**静岡県立伊東高等学校『幕が上がらない』** 上演空間、上演装置として客席のみで演じるという決断と潔さに脱帽。演劇的表現の多様性を突きつけられた。これを芝居として良いのかという問いは必ず起こることとを感じるが、これも演劇。遠い席では台詞も聞こえない。客席通路で何をしているのかわからない。いつもの表現範疇に無いこれも演劇。客席で演じる高校生の集中力よ。客席で演じながら観客に媚びない。短い当たりの時間で移動とセリフのタイミングを良く合わせ成立させている。最後に上がって降りる緞帳は1枚でよかったと思う。**北海道**

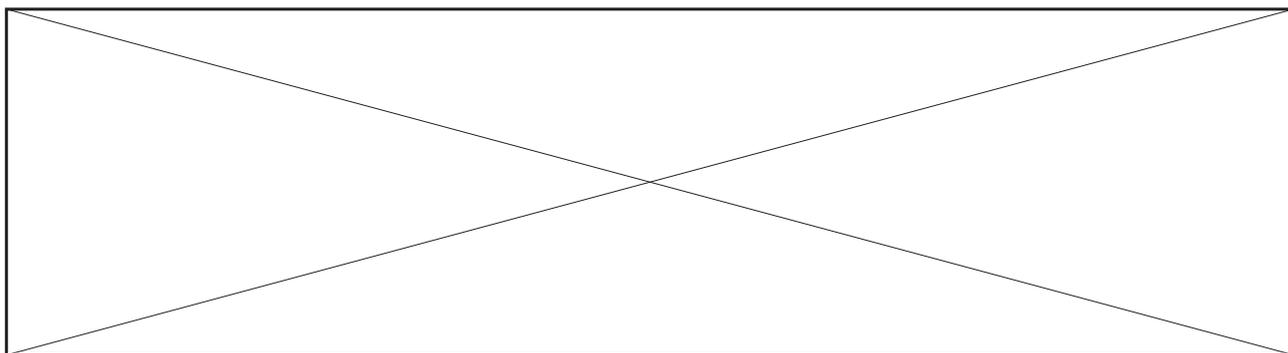
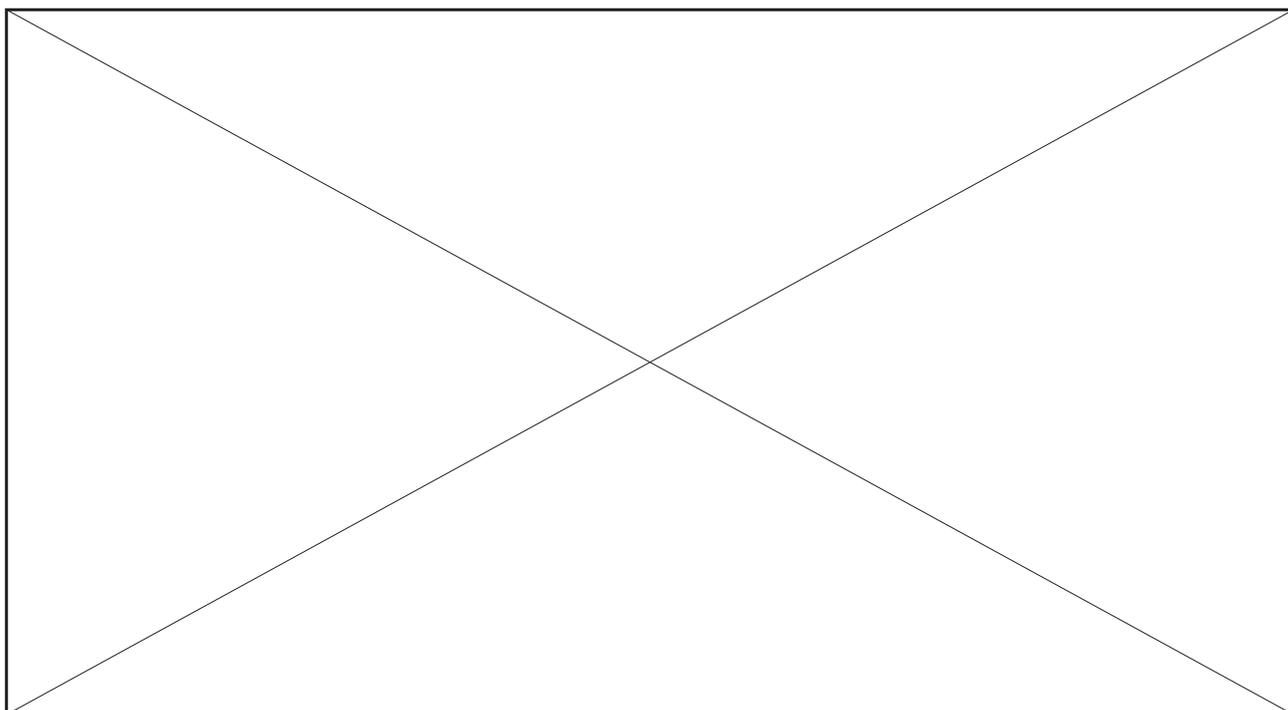
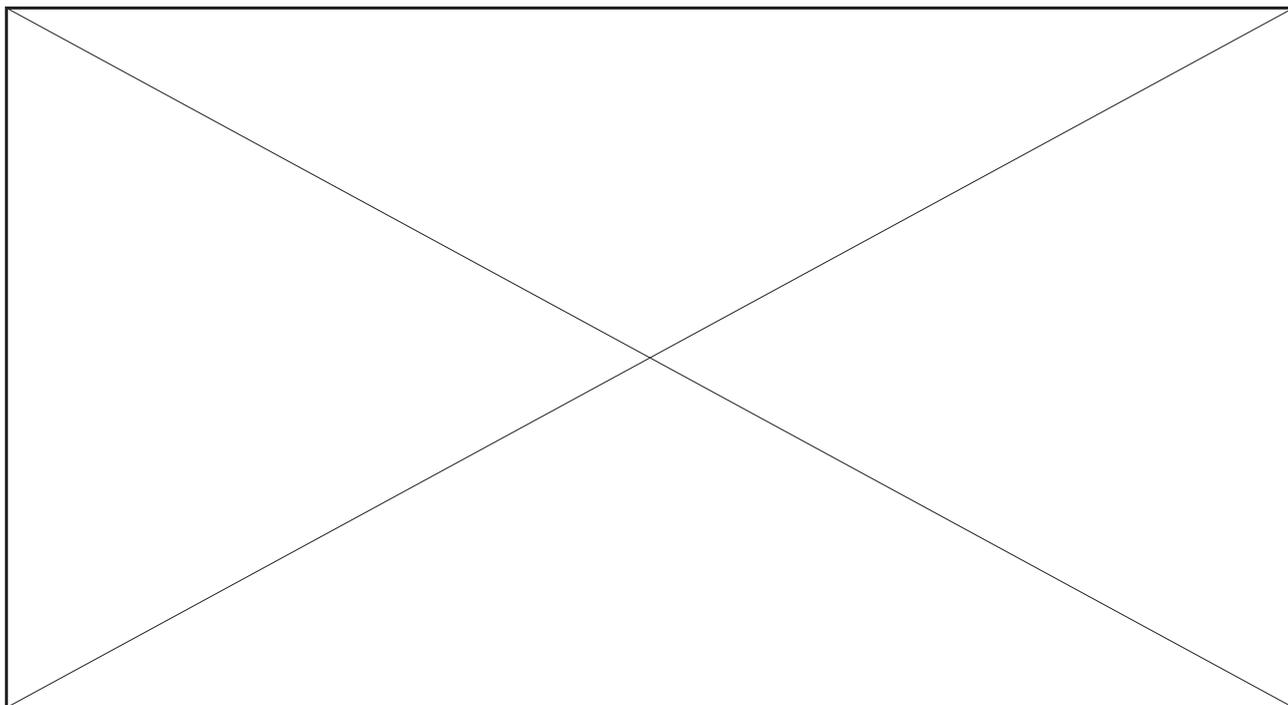
北見北斗高等学校『営呂から TOKORO curler』 正面に間口2間ほどの座敷があり、それを挟んで下手黒パネル前にベンチ、上手に父と母が営む店がある。この客席に正対した三つのエリア分けが演技エリアの構成として単調。合わせてセリフが噛み合わないせいか父の実体感が希薄になりがち。しかし、その全てを補うような最終場へ場面展開と、雪と氷の白い世界、夜の空、またたく星。父と娘のストップモーション、美しい。が、このシーンの為だけに全てがあったような印象。**広島市立舟入高等学校『八月の青い蝶』** 幕開け、少年が青い蝶を自分一人の標本としてピンを刺すシーンは、ピカリと鋭角的な反射光が見えたかった。センター3尺程の高見は座敷や堤防上になり、廊下や岸边となる七寸ほどの台が付属する。下手は家の外、上手は回想するかつての少年が老いてベッドに横たわる現在。この全ての装置は斜めに振られ、蹴込の色と質感を使い分けることで照明によるエリア分けを巧みにしている。紗と切り出しを使った透し彫りの様なパネルも効果的。ピカッのシーンは、水平線を淡く強い光で染め、舞台上に立つ人間を石に焼きついたシルエットの様に浮かび上がらせた。芝居として質の高い丁寧な演技と美意識を感じる。**岐阜県立岐阜農林高等学校『Is (あいうえお)』** 無対象のボールのシュートが決まるとゴールネットを揺らす。このアイデアでボールの存在が見えた。またバスケットのゴールポストとアイス製造機が裏表になっており、この作品にちりばめられた幾つかの掛け言葉と装置のリンクも面白い。埋め込まれたパロディ的な要素が、終盤出て行く少女Sを止める人間バスストップの表現にギャグではなく必然性を感じる。少女Sの身体能力がバスケのリアル感を作り出している。**北海道清水高等学校『その時を』** 袖間口を5間半程に狭めた舞台。舞台上には何も無い。自転車で登校するシーンはフォーメーション・スピード感・落ちまで良く考えられている。蛍のバック股挟み懐中電灯を含め、全体に可愛らしい作品。後ろ向きでのセリフシーンやテンポ等演出

的な視点がもう少し欲しい。佐賀県立佐賀東高等学校『ボクの宿題』17個の大きさや向きが違う白い箱が舞台上に点在する。意味ありげな一本の脚立。息子の未来と過去から眺めた自分のと交錯を、白い箱・アンサンブルの黒・赤い花・ブルーライトと白いサス等々でスタイリッシュに表現している。家族をテーマにした作品ではあるが母親をもっと語ってほしかった。埼玉県立芸術総合高等学校『解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話』幕開け6間間口に狭めた空間にオブジェとしての椅子の集積が見える。場面の進行とともにこの椅子が移動され人間の個の存在の表現へと変化する。小道具の使い方が美しい。照明も窓明りというエフェクト以上に解体される建物のリアルな空間をイメージさせて巧み。言葉の受け渡しに心の交流があり、息吹、敬虔、癩癩他の役名が浮いてこない完成度が見える。徳島県立阿波高等学校『2016』舞台前端から斜めに横切る立体的な校舎とトイレの壁。センター上手に登退場口となる建物の隙間。空間の設定と切り取り方が上手い。建物に付属するパイプや庇、雑然と置かれた小道具もこのリアルな立体感に効果的。科学部の見せるチープな未来像と現実の2016とのギャップを演出している様に見えるが、演技のチープさが

減殺している。勿体ない。和歌山県立串本古座高等学校『扉はひらく』舞台上に机と椅子が対角端に置かれサスのみでの始まりは、両者の学校の中での孤独感を感じさせる。また、教室の自分から私服に、私服から制服の教室へ舞台上での着替えは二人の心の日常と重なる。ひとりぼっちになりたくないムラタと、ひとりであることに諦めむしろ気が楽と感じるヤマグチ。エレベーターでの典型的な閉じ込められるものではあるが、ドラマの展開に選択した映画の筋や、すたれたブーム韓国語趣味など心の扉を開くための工夫はある。山梨県立白根高等学校『双眼鏡』黒バックにセンター大きな時計。1.8尺角ほどのカラフルなサイコロブロックを積み上げ壁を作っている。一人きりの出演者、引きこもりの沙織が双眼鏡でその隙間から客席を除く。このブロックは沙織のためのトーチカ・塹壕の様でもある。時計は沙織が振り子の紐を引くことで時間を進める。長針・短針が連動していて良くできている。沙織は設定に寄りかかった感が見え、演じるその瞬間の心の動きのエッジが摩耗していた様に感じる。

(舞台美術家)





高校演劇 いいね！



加納 豊美

感動の毎日。涙腺決壊が多発。上演作品群の熱、そして組織運営の熱にすっかり魅了されました。

高校演劇全国大会はこの広島大会がなんと62回目!!この継続力は、高校演劇の現場の先生がたの熱の賜物に違いないでしょう。『2016ひろしま総文祭』のテーマである言葉たち<創造の風 希望の光 平和を願う心>は、熱気の地層を成すものだと感じています。

これまで、高校演劇を、積極的に観てきませんでした。関心を向けてこなかったことを猛省しています。

『Final Fantasy for XI.III.MMXI』・『ブルーシート』・『翔べ！原子力ロボむつ』・『もし高校野球の女子マネージャーが青森の「イタコ」を呼んだら』は。演劇界の注目を集めた後に、東京で観劇しました。これら一群の作品は、わたしたちの現在地を鋭く照射するものです。劇作の豊さを"リアル"に遊ぶ"高校生たちの身体性にも目を見張りました。高校演劇出身の各作品は衝撃的でした。演劇の底力を感じたのです。

この度の12作品連続観劇は、熱中時間そのものでした。演劇の底力がグイグイ迫って来たのです。演劇は、観客と共にイマ・ココに生れ落ちる芸術であることを感じ続けていました。高校生だから出来る・高校生にしか出来ない作品であることに違いないのですが、そのような括りは無効なのだと思うに至りました。

一校毎の上演終了後、審査員7名は一旦審査員控室に戻り、休憩という時程が組まれていました。が、一同は入室するや、話したいことが一杯あり過ぎて、休憩どころではありませんでした。専門審査員4名はそれぞれ、劇作、演出、美術、衣裳の観点から語るに止まりません。演劇には専門分野の境界なく、全ての要素が融解していることは言うまでもありません。語りは演劇論としての熱を帯びてきます。演劇部顧問をなさっている先生がた3名も、熱い！高校演劇に対する愛の深さ！永年のご経験あってこそこの批評の数々！とても、とても刺激的で創造的な審査員控室となりました。

このように批評の渦が巻き起こっていましたので、最終的な賞決めの話し合いは、更に言葉を交わし合うも、合意形成に難航することはありませんでした。大会最終日の講評は、7名の批評の言葉を紡いだものです。それを軸に、持ち回りで語るという方法を取りました。すべての作品から揺さぶりを受けたこ

とが伝わっていることを願います。

各作品へのコメントは、出来るだけ"衣裳"について触れたいと思います。

『そらふね』

劇中劇"そらふね"シーンでの衣裳の工夫が効果的でした。姉妹が希望を取り戻していくイメージが、暖色系の色彩を加えていくことで、表現されていました。井上ひさしの『父と暮せば』や大江健三郎の『ヒロシマノート』へのオマージュも感じました。

『アメイジング・グレイス』

とても豊かな"ジャージ演劇"。演出と衣裳プランが一体化しています。"ジャージ"は自在に広がるイメージを保証していました。高校生であるひとりひとりのまま、何にでも見立てることが出来るのです。"見立て"は、演劇が得意とすること。赤色と白色の色彩設計は、日の丸を連想させるものでもあり、劇の物語と今日を同時に照射していたと感じました。

『幕が上がらない』

"ニラ"と呼ぶしかないリボンタイのダサイ制服の女子生徒。相変わらずのダサイメガネと学ランの男子生徒。出演者の日常の制服が、"伊東高校嘆き芝居"の抜き差し成らない衣裳になっていました。強烈なメタシアターであり、大胆なメタ高校演劇。記憶に残る作品です。

『登呂から TOKORO curler』

物語の時代背景や地域性、登場人物のキャラクター表現に苦心した衣裳プランであったと思います。現実をそのまま再現できたとしても、それが"リアル"に感じられないのが"演劇のリアル"です。厄介ですが、厄介を楽しむことが創作の入り口になると思います。最終景の氷上のシーンはとても美しいものでした。

『八月の青い蝶』

原爆を題材にした演劇を続けていらっしゃる高校があることを、恥ずかしながら初めて知りました。伝えていかななくてはと襟をただす思いです。

71年前の登場人物たちの衣裳は、時代考証を必要とするものばかりで、調べる作業に取組んだことを感じました。同時に、衣裳プランをリアライズすることが、高校生にとって困難であることも感じ取りました。アドヴァイスできるチャンネルを持ちたいと思います。

『Is (あいす)』

爆笑&号泣の嵐でした。劇作・演出・空間・身体すべてが、何を創ろうとしているのかをクリアに表現されていたと思います。演劇そのもの、観客に対して、そしてカンパニーメンバーによせる信頼を強く感じました。農場生産実習の場面の生徒たちの作業着の着方は実にバラバラでした。こういったディテールを観ると嬉しくなります。全てのディテールを演

出の対称として発見すればするほど、作品は輝くことの証です。

『その時を』

等身大の日常を、愛おしく描いた作品だと思いました。"ゆるくて熱い"劇作の世界観を、衣裳でも表現しようと工夫されていたと思います。学ランと赤Tシャツの組み合わせや、おばあちゃんのシュシュなどにそれを感じました。もう一步踏み込んで遊ぶことで、観客の気分をくすぐっていいかもしれません。

『ボクの宿題』

コロスの身体表現がとても印象に残りました。コロスたちの衣裳は黒で統一されていました。黒色はコロスに使い易い色です。一方、別の冒険もあっていいと思いました。色彩の洪水のようなデザインもありかもしれません。

『解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話』

白色系に統一された色彩設計、そして裸足にしたことで抽象性の確保が出来たと思います。登場人物の名前が、息吹、敬虔、奔放 等々とされている劇作の世界を捉えようとしたデザインであると感じました。9人の人物の衣裳は、各人各様にデザインされています。どれもが俳優自身にも似合っていました。

この戯曲を選ぶという企画力にも注目しました。

『2016』

遊び心満載の衣裳プランであったと思います。更に踏み込むことも出来ると思います。もう一步強調したり、省略したり、ということが創作の醍醐味だと思うのです。舞台空間を全体から部分、部分から全体というように、見て行くと、思わぬデザインの発見がありますよ。

『扉は開く』

出演者2名による劇作であることが、何よりの強みだと思います。どこまでいけるか、次々と大量に生み出されて行くことを願っています。小物使いで、シュチエーションを変容させていく工夫が光っていました。

『双眼鏡』

カラフルなキューブの装置と、モノクロの衣裳が色彩の対比を成していました。舞台空間全体をデザインする視点を感じました。とても大切なアプローチです。装置と衣裳の色彩の逆転もありかもしれません。数えきれない選択枝の中から、決断して行くことは、デザインの醍醐味だと思います。

(衣裳プランナー(術) アトリエDIG代表・多摩美術大学教授・東京演劇大学連盟理事・ITI国際演劇協会日本センター理事)

表現力の豊かさが魅力・・・



米永 道裕

広島暑い夏に負けないくらいの、エネルギーと、高校生が持つ表現力の豊かさに魅せられた3日

間でした。

『そらふね』 沼田高校

原爆について真摯に取り組んだとても良い作品だと思います。どんな困難にも立ち向かう「そらふね」の話と美味しいご飯の炊き方に、どんな事があっても、二人が幸せに生き続ける事を願っていた、母の気持ちがストレートの伝わるお芝居でした。「そらふね」の話の中で、美味しいご飯の炊き方が語られると良かったと思います。原爆にこだわり続けた作品創りが更に広がりを見せていくのを期待します。

『アメイジング・グレイス』 青森中央高校

鬼ヶ島という想像力をかき立てる事ができる素材をうまく使い、国と国との問題、人種、その中で翻弄される二人をうまく表現し、最後に鬼も人間も棒炭になって初めて一緒になり、ようやくわかり合えるという絶望感。それらがアメイジング・グレイスの曲にマッチしながら、伝わってきました。役者の技量も高く、とてもクオリティの高い作品でした。絶望の中、一筋の希望を見せてくれると良かったかもしれません。

『幕が上がらない』 伊東高校

伊東ですいません。伊東の分際で、など自らをディスリながらその中で生きていく今をストレートに表現された作品でした。客席を演技空間とし、幕が上がらない自分たちと結びつけた、高校生の今が聞こえてきました。役者も達者であり、十分魅せてくれるのですが、客席を舞台としたため、台詞が聞こえない、何をやっているのかわからないなどの問題があった事も否めません。

『常呂から TOKORO Curler』 北見北斗高校

北海道を感じさせてくれた、心温まる作品でした。ラストの父と娘がカーリングストーンを投げるシーンもとても綺麗でした。少し残念だったのは、ラストに向かうまでの描き方が不足していた点です。周囲に理解されなくても、必死に何かに取り組んでいる父親の姿に反発を覚えながらも、最後に父を認め

ていく姿をしっかりと描くとラストシーンがもっと生きてきたと思います。

『八月の青い蝶』 舟入高校

とても洗練された装置の中で、父の妾に対する亮輔のきれいな思いが伝わってくる舞台でした。しかし、亮輔の希恵に対する思いは、母親ではない女性に惹かれていく、大人になりかけの少年が性に目覚めていく男の子の思いです。そこをしっかりと描く事で、希恵を青い蝶として誰にも知られることなく、密かに自分だけのものとし、死の間際まで困っていた亮輔の心がより伝わって来る舞台となると思いました。

『Is (あいす)』 岐阜農林高校

幕開きから、ラストまで直球勝負で減速することなく、観客を魅了し続けた素晴らしい作品でした。様々なテクニック、演出方法、そういうものを超えたエネルギーあふれる舞台でした。揺れるゴールネットだけで観客にバスケットボールを見せたのも素晴らしい。Sサイズのイチゴをアイスに再生する事と、Sが再び前を向いて歩き始め、希望ある未来に繋がっていく事に素直に感動できる作品でした。

『その時を』 清水高校

役者の力量とエネルギーを十分感じさせてくれた舞台でした。閉校になる学校の生徒達が抱えていた問題や、真衣が抱えていた問題が、高校生にとって身近な問題であった事がとても良く愛すべき作品でした。ただ惜しいのは、幕が開いた直後の疾走感が最後まで続かなかった事です。青木商店の花ちゃんと真衣の関係をもう少し描くとストーリーにも膨らみを持たす事が出来たと思います。

『ボクの宿題』 佐賀東高校

駄目な父親と引きこもりの息子が、宿題を通して未来への希望を取り戻していく心温まる作品でした。ダンス的な動きもとても綺麗でした。しかし、父親がなぜ母親と別れたのか。仕事を辞めて逃避して、競馬にはまったから別れたのか。母親はどういう人で、何故戻ってくるのだろうか。夜と霧は何に繋がるのだろうか、などの疑問が残る作品でもありました。しかし、必死に走り続けた父の姿には魅力を感じました。

『解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話』 芸術総合高校

「言葉でコールドバレエを表そうとした」とありま

したが、まさにそれを実現した演出家が素晴らしいと思いました。装置も椅子だけで様々な空間を表現しており洗練された空間を作り出していました。透明感ある作品で、役者の技量や身体能力の高さを感じられその場にしかない、その瞬間の女性達をしっかりと描ききってくれました。説明台詞がなくても、どの子が何を考えているかしっかりと伝わってくる点も良い。

『2016』 阿波高校

30年前のチェルノブイリをベースにしながら。ミーナを通じ、福島を感じさせながら、今はどういう時代なんだ、これで良いのかという事を感じさせる舞台でした。舞台装置はとても良く考えられ、壁の隙間も角度も良く、学校の裏を感じさせてくれました。また、セットを極力前に出し、閉塞感を生み出したのも効果的でした。ミーナは何に怒っていたんだろう。という疑問が払拭しきれない感じが残ったのが残念です。

『扉はひらく』 串本古座高校

自分を欺きながら、居場所を見つけていた高校生が、生きる場所を見つけた様にみえる。しかし、現実に戻るとそうは生きられない。でもいつかは、という思いがストレートに伝わってきました。舞台空間の使い方も閉鎖されたエレベーターの狭い空間と、広い教室で二人の距離感の違いを表すなどとても良かったと思います。ノッキング・オン・ヘブズ・ドアという映画から受けた刺激を、自分達の舞台とした二人の力は素晴らしい。

『双眼鏡』 白根高校

沙織の引きこもり空間での葛藤を描き、父親が死んだ時の思い出など、舞台上で展開されていた事が、ラストに、全て引きこもりごっこでした。という台詞や、オヤジめし出来たら起こせよ。などで、全てをごっこだったで終わらせた事が逆に切ない沙織の心を感じてさせる舞台となりました。大きな時計とブロックを積み上げた装置も良く沙織が、ブロックの向こうにチラッと見えるのがとても効果的でした。

(全国高等学校演劇協議会理事・北海道高等学校文化連盟演劇専門部事務局次長・北海道札幌藻岩高等学校演劇部顧問)

素晴らしい舞台、広島、ありがとう！ 宮城で待ってます！



安保 健

楽しく、切なく、優しく、素晴らしいかった。どの芝居も自分たちにしかできない唯一無二の舞台でした。

沼田高校『そらふね』

二人の演技が真摯に被爆者の苦悩を描き、被爆者への根強い差別と苦悩という暗く重い現実を「そらふね」の皆さんと山岡のおばさんが優しく二人を包むことで救われました。ラストで、姉の写真が飾られ、原爆症で姉が亡くなっている現実が提示されます。「そらふね」の船長と子供たちの明るさと、妹の未来に向かって生きていこうとする姿に心が動かされました。見終わって広島弁は人情がこもっていると思いました。

青森中央高校『アメイジング・グレイス』

とにかく飽きさせない。観客の意識を集中させたとすると、拡散させる。会話の速度を速めたとすると、停止させて観客に考えさせる。独りになったと思ったら、全員を登場させる。時間と空間が緻密に計算された舞台でした。桃太郎が侵略者で鬼が被害者である本質を突く発想も、笑いが散りばめられ進行していく。ラストが衝撃的で、爆撃の後に立ち上る煙のようにアメイジング・グレイスが流れる。完成された芝居だと思いました。

伊東高校『幕が上がらない』

ハイスクール・デイズ…？いやいやハイになれず敗、廃になって灰になる。どこか観客を寄せ付けない毒のようなものを含んで始まる。幕が上がらないし客電を落とさない。客席を舞台装置にする。観る側にとっては大変である。前列や二階席は芝居を楽しめることができたかどうかである。舞台上であれば落ち着いて観ることができるが…でも、これがこの芝居の狙いである。それにしても抜群の演技力と練られた台本は圧倒的でした。別の集団が2階席でも同じ芝居をしてはどうだろうと思いました。

北見北斗高校『常呂から TOKORO curler』

最近の大人はムキになって何かをやり遂げようとしているだろうか？世の中を変えようと努力しているだろうか？このお父さんの演技から十分にそれが伝わってきました。また、娘の父への複雑な気持ち

を通して娘の成長がよく描かれていました。ラストで父がコートに娘を入れようとする、でも、娘は大きすぎて入らない。父と娘の別れを見事に描いている。満点の星と、父を取り巻く家族と友人の心根が優しい。心がホットする芝居でした。

舟入高校『八月の青い蝶』

「亮祐は髪を洗う希恵の綺麗な肩、肩胛骨を目撃し綺麗な蝶と重ね合わせる。希恵は亮祐が覗いている視線を感じていた。」とある。この異性に目覚める多感な亮祐と青い蝶のような病弱な希恵の微妙なバランス。演技と演出がとても難しい。しかしながら皆さんは丁寧に演じ静かに劇は8月6日に向かって行きました。この難しい小説を脚色し60分の芝居によくできたと思いました。これからも歴史の中で語られることのない、秘めた広島歴史を再現してください。

岐阜農林高校『Is (あいす)』

Iは愛地、Sは小百合で、Iは私で、Sはshe (彼女)で、二人合わせるとISで、ISをアイスと読ませ、アイスは二人を繋ぐイチゴアイスで、ISはbe動詞で「ある、いる」を表す「存在」である。また、アイスは「時間が止まる」にも繋がっている。苺を大切に育てることは自分たちの生き方にも繋がる。あっという間の60分でした。アイデアの塊であり、疾走感、バスケには眼を見張り、こちらやりたくなる。もの凄くエネルギーを費やして創った芝居だと思いました。

清水高校『その時を』

自転車ではじまり自転車で終わる愛すべき芝居である。女の子の話で盛り上がる男子は単純でバカである。演技が素直で好感が持てる。どこか清々しく心が洗われる。ラストで恋人になるかもしれない青木が亮祐の自転車に飛び乗る。どこかほろ苦くて甘い青春がある。このかけがえのない時間「その時」が「あの時」に変わっていく。そんな瞬間を描いた芝居でした。

佐賀東高校『ボクの宿題』

愛川恭一君が悩める中学生そのものでした。父の離婚が息子の心の奥深くにある。息子にとって父の離婚は大きな傷である。父は根気強く、30年後に生きていないと言う息子の心を癒やしていく。その過程が丁寧に描かれていく。父の演技を通して息子に対する熱意が伝わって来ました。欲を言えば妻との離婚についての具体的なやり取りがあればと思いました。脇を固める役者も訓練されて2人を効果的に

浮かび上がらせ、電球と脚立が効果的で、力作だと思いました。

芸術総合高校『解体されてゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話』

人間は死に向かって生きている、そして、あっという間に時間は過ぎていく。その切なさを少女たちの仕草、会話、独白で描かれる。優れた脚本であるが、演じるにはとても難しいと思いました。息吹は23才で亡くなっています。少女たちもやがて年老いて死にます。旧体育館がやがて解体され墓地のように、時間に耐えるものなどない。少女たちの不安、畏れ、嫌悪、愛情、孤独などが互いに反応し合い、美しく描かれていたと思いました。フロアーが黒だともっと良いと思いました。

阿波高校『2016』

幕開けで壁に寄りかかったミーナはマネキンのようであり、人間のようにもあり、亡霊のようである。これがこの劇を象徴している。30年前（1985年）のチェリノブイリ、ワールドトレードセンターなどが提示される。1985年から観る「30年後」の2016年は福島原発、テロなど、30年前と比べて決して良くなっていない、むしろ悪くなっている。この芝居は私たちに『30年後(2046年)は「どうなっているのか」』とラストで観客に語る皆さんの姿がとても印象的でした。

串本古座高校『扉はひらく』

エレベーターに閉じ込められた二人、まさに劇的である。2人の反応が適切であるので納得して観ることができました。背後に流れる曲は全曲ボブ・ディラン。ラストでヤマグチにムラタが元気よくあいさつするがムラタは返せない。肩を落とすヤマグチに心が？っていることをヤマグチだけに分かるように語る。山田洋次の「遙かなる山の呼び声」のラストのような温かさを感じました。

白根高校『双眼鏡』

この芝居は主人公の沙織が6時15分に双眼鏡で人を探している時間から見知らぬ人物との待ち合わせの7時までの45分の独り芝居である。沙織には漠然とした死の予感が横たわり、明日が見えてこない。そのために自己はボロボロで何も信じられない。その不安定な沙織を、よく独りで演じきったと思います。また、祭りの音が沙織の心情と対照的に流れ効果的で、大きな積み木のような舞台装置も沙織の心情を的確に表現していたと思います。台本も練れた本だと思いました。

(宮城県名取北高等学校 現職顧問)

第62回全国高校演劇大会(広島)を観て



井口 守

「良い芝居の後には、観客から自然と声が出る」

審査員控室は、休憩時間があつてないようなもので、それこそ、審査員控室へ戻るエレベーター内で、すでに芝居談義が始まっていました。そして、最終日の審査講評でも、マイクが次々と審査員の手を渡っていきました。たくさんの愛すべき芝居に出会えたことに改めて感謝いたします。

①広島市立沼田高等学校「そらふね」

丁寧に思いを紡ぎ、広島で育ったことを部員が誇りに思っている、それが伝わる芝居でした。「そらふね」の話も、部員総出でファンタジーシーンを構成していて好感が持てました。劇中の「幸せになる資格」という言葉は大変重い言葉で、原爆がいつまでも人生にのしかかる、生きるということの本質を問う言葉だと受け取りました。明日もごはんを戴ける、その喜びを感じさせる芝居でした。

②青森県立青森中央高等学校「アメイジング・グレイス」

「本気」を感じる学校だと思いました。コミカルさを残しながら、鬼側の視点から人間社会のもつ醜さを表現していました。「桃太郎を忘れるな」は、滑稽さに狂気が含まれる、凄まじいセリフです。最後の合唱をもってしても「友情」という中心軸が、私の中である程度で上がり止まってしまったのは、友情が「伝えたいことの総括」でなく、多く提示されるテーマの「一部分」に思えたからかもしれません。

③静岡県立伊東高等学校「幕が上がらない」

観客によって捉え方も様々と思います。二階席などはフラストレーションがたまったかもしれません。その観客の感情をも全部計算されていると感じました。日常の鬱屈や諦観が、その熱量から伝わってきます。大河ドラマ「真田丸」でいうと、まるで上田合戦の徳川方のようなようでした。攻め手（観客）があの手この手で翻弄されます。攻め手は「何だか分からない」が完敗する。何と戦上手なのでしょう！勝ち上がるごとに付加価値がついてしまうため、地区大会が一番面白い芝居だと私は思います。それでも圧巻の芝居でした。

④北海道北見北斗高等学校「常呂から TOKORO curler」

観終わって幸せになる芝居だと感じました。ラストのカーリング場への場面転換が素晴らしく、青と白の対比の美しさの中から、親子の情愛が伝わってきました。松ちゃんが背中を向けた芝居もリアリティがありました。欲を言えば、背中向きで座らせる意味づけがあればと思いました。父親・母親も巧みな役者でした。

⑤広島市立舟入高等学校「八月の青い蝶」

まず、舞台の美しさに魅了されました。原爆投下を、音を一切鳴らさず、影絵のように表現したのも心を揺さぶられました。亮輔を女性が演じることに様々な意見があると思いますが、「僕は変節漢だよ」というセリフで、客席から温かい笑いが起こった時、この少年が「少年」として受け入れられたと感じました。全体的に、少し説明を減らし、観客に委ねても良かったとは思いますが。

⑥岐阜県立岐阜農林高等学校「Is (あいす)」

「愛地とS」「存在する=is」「アイスクリーム」…タイトルとの結びつきで感動させられたのが新鮮でした。役者もそれぞれ魅力的だし、バスケットゴールの揺れ、アイスクリームがドロッと流れ出る瞬間、愛すべき軽トラ、バス停のディフェンス、どのシーンを思い出しても感動が蘇ります。農林高校の特性を生かしつつ、皆が遊び心と熱量をもって作り上げた圧巻の青春芝居！個人的には「壁の模様替えに行きますわよ」のセリフが好きです。

⑦北海道清水高等学校「その時を」

オープニングの疾走感は群を抜いていました。のどかな雰囲気を出しつつ、このシーンの赤信号がラストにつながっているのも、よく練られています。演技も非常に素直で、特に生徒会長・おばあちゃん役の生徒さんは魅力的でした。演出でも、マイの登場シーンを、次々に撃たれることで表現する姿に大笑い！ホテルの着替え待ちはやや残念でしたが、ラストは大変良い気持ちにさせてくれました。

⑧佐賀県立佐賀東高等学校「ボクの宿題」

チーム全体の力が大変強く、技術力もスバ抜けていて、思わず息を呑みました。主役二人の役者も達人でした。少年の宿題を完成させる形で、父親の人生を追い、最後には父親と息子の双方が大人になっていく、戯曲の構成も見事です。「競馬」という記号は、どうしようもない人間の弱い性を感じさせるものの、自業自得な感も否めず、共感という点では

弱いと私は感じました。

⑨埼玉県立芸術総合高等学校「解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話」

女子大学生たちの様々な感情が、洗練されたセリフや動きに裏付けされ、観客たちに浸透していく、非常に美しく優れた芝居でした。椅子の配置も的確で、随所に繊細な美意識を感じました。そして、象徴的にネーミングされた役柄を役者たちは真摯に演じていました。息吹役の目の輝きや、敬虔役の立ち姿、哲学役の苦悩ぶりなど、枚挙にいとまがありません。時折聞こえにくいセリフもありましたが、それを凌駕する芝居だと私は思います。観終わった後、「この女子大生たちに幸あれ」と感じたのが、その証です。

⑩徳島県立阿波高等学校「2016」

作者のノスタルジーを部全体が愛した芝居だと感じます。舞台美術の素晴らしさは言うまでもありません。「30年後の未来」という荒唐無稽な想像シーンが投げ込まれ、現在にはないもの、そして「未だに存在し続ける恐怖」も表現していたのが興味深いです。コミカルな部分は本当に面白く、特に大好きなのは「おたかさん」。本当に華やかな存在でした。最後のムカデ競争も、現代人ののんきさ、画一化、均一化を考えさせる装置となっていました。

⑪和歌山県立串本古座高等学校「扉はひらく」

生徒二人が作り上げた渾身の友情芝居でした。何より素晴らしいのは距離感です。ムラタ君の「ぼっちになりたくない」がゆえの空回りが哀愁を誘い、弱者がより弱者を見下す繊細な距離感に胸を打たれます。そして、エレベーターというわずかな空間で距離が縮まり、嬉しいはずの「扉がひらく瞬間」が「現実世界に戻る＝距離に戻る」悲壮感を感じさせます。振り絞った「ムラタ君！おはよう！」は珠玉のセリフでした。

⑫山梨県立白根高等学校「双眼鏡」

終始観客を観察し続ける、驚きの一人芝居でした。やはり目を引くのは、大きな時計。沙織自身で針を動かすところは、沙織が時間を握っているように思えますし、大黒幕に写った影も真っ黒い心の空洞を表現しているようです。ボーダーシャツも囚われ人を思わせます。真意は「沙織に聞いてください」と言われそうですが（笑）。一人芝居だけにもっと遊びの部分は欲しかったと思います。

(滝川第二高等学校演劇部顧問・落語作家)

第1分科会

演技・演出

演技・演出について

講師 森 さゆ里

大ホールにて約500名の参加者より質問を自由に出してもらい、講師の先生よりアドバイスをいただきました。司会者の村岡先生とのやり取りを通じ、具体的な演技・演出のヒントを提供する場面もありました。90分の時間制限があるにも関わらず、他県から約20件もの質問が活発に出されました。

Q1：発声練習では腹から声が出るのですが、シーン練習になると無理してしまう。改善方法はないか。

A：基礎訓練と稽古とは別と考えた方がよい。スポーツと同じ。例えば、ピッチングホーム作りや走ることが基礎練習にあたり、試合は稽古になる。

Q2：動きの練習で、緊張と弛緩を意識しているが、本番では面白いことができない。動きの練習の基礎訓練と稽古の方法を教えてください。

A：面白くしようと思わないこと。面白いことはリアリズムとは違う所に出てくる。今回の作品にもあったように、バスケット、ダンス等、作品によって実際にやってみて、稽古してみること。

Q3：普段、狭い場所で練習している。声の高低で低い声は聞こえにくい。大ホールで響く声の練習方法は？

A：声の高低は問題ではない。小さい声でも聞こえる。発声の基礎訓練をしっかりとってほしい。聞こえにくいのは、滑舌の問題である。口の筋肉を動かすことである。

Q4：多人数で1つの作品を作るときに大切にしていることは何か。

A：報・連・相である。共通意識を持つことが大事。作品は演出家に気に入られる為ではなく、作品を作る為に作るのである。

Q5：経験した事のない役をする時、何か良い練習法はあるか。

A：大人も同じ、江戸時代、戦地へ行く、人殺し等経験したことのないケースはたくさんある。女子高生は数学が嫌いな子は多いと思うが、大好きな役をする際に、数式を好きなアーティストの楽曲に置き換える等してみたらよい。すなわち自分の日常に置き換えてみることである。

Q6：高校1年で演劇を始め、演出家になりたい。何に気を付けたらよいか。

A：高校生ではまず相談し、誰のGOで始めるかを決める。演出家は脚本、人数、空間等選択する。何の為に選ぶか、客にどうしたら伝えられるかを日々考えていくことである。舞台に立つとわからないので、演出家は、演出に専念をした方がよい。好きに動いてもらい、立ち位置、空間の設定を演出家が見つけていく。

(文責 広島県立三原高等学校 佐藤 勇治)



第2分科会

劇 作

「劇作家と漫画編集者、二足のわらじを履いて」

講師 中島かずき

第二分科会は講師と全国高演協事務局長・阿部順先生との対談形式で進められた。上記テーマも、参加する演劇部員たちは卒業後の進路についても考えねばならず、講師は高校演劇出身であり、「演劇（劇作）」と「漫画（編集）」という二つの好きな道（夢）を実現された先輩、参考になる話が……との阿部先生の意図から。斯道の先輩からは劇団☆新感線がらみの興味深い進路のお話も伺えたが、字数の関係上、本報告は「劇作」に関する事柄にしぼり、他は割愛。一つだけ記すと、漫画編集者として出版社に勤務していたから芝居を書き続けられた。どんなに仕事が忙しくても、自分が書き続けられる人間かどうか兼業すると分かる、とのこと。

【自分のおもしろさを追求】

大学時代は年に300本の映画を観ていた中島先生。劇作を意識しながら観ることを推奨。その作品のおもしろさはどこにあるのか言語化してみる。どこに自分の心が動かされたか、そのポイントをつかむ。このこ

とは自身が芝居をつくるベースにも。自分がおもしろいと思うところを信じて、そのおもしろさをどう演劇表現として伝えたいかを考えている。伝わらなかったのならそれはなぜか、伝わったのはなぜか。自分の芝居づくりが真摯な表現行為になっているかを常に考える。(集団創作のような)合議制で書いたものより、誰かの強い思い込みで書かれたものがおもしろいということがある。

【中島先生の劇作のルール】

- ・登場人物の名前をすごく考える。名前が決まるということはその人物の役割が決まることだから。
- ・ラストシーンが見えてから、そこに向かってプロットをつくっていく。
- ・(自分が書く芝居は)二幕ものが多いが、一幕の終わりにインパクトのあるひとつのクライマックスを持ってきて観客の興味を惹きつけておく。二幕の頭は状況をがらりと変えては始める。
- ・登場人物たちの行動を作家の都合で書かない。その人物の考えで動かしていく。どんな変なネタでもその人物の中から出た、筋が通ったものならOK。登場人物の内面を引き出すつもりで書く。そのため自分の中にどれだけ他人をストックできるかは大事。いわゆる「人間観察」をしたり、なぜあの人は(自分には理解できない)こんな行動をとるのかを考えたりする。



【質疑応答から】

- ・中島先生が追求する「エンターテインメント」とは？ 最初に提示された謎がラストでちゃんと解決すること。その過程で観客の感情をジェットコースターのように揺り動かす。見終わったあとのカタルシス。
- ・書き悩んだときは？ そんなときも「しみじみ手を動かす(書く)」。若いころは、好きな作家のものを書き写したり、三題噺(さんだいばなし)で構成力を鍛えたりした。

最後に「出会いを大切に、これからも豊かな高校演劇をつくり続けてほしい」と締めくくられ、会場から大きな拍手。

(記録者：鳥取県立境高等学校 森川 剛)

第3分科会

舞台技術について

舞台技術

講師 土屋茂昭／長田佳代子／乳原一美／藤田赤目／吉木 均

第3分科会は、芝居付きの技術講習という形式で行われた。本分科会では、台本に竹内統一郎氏の『東京大仏心中』を8分間に抜粋したものが使用された。地元の高校生が講師の指導を受けながら直前の3日間で作成した装置を使い、地元の舟入高校の生徒2人の演技に合わせて照明・音響がどのように作られていくのかの実演が行われた。

無音・地明かりのみの素通し

装置と地明かりのみで生徒2人による演技が行われた。

照明と音響を作って行く過程をみていく

生徒2人による演技に照明と音響が加えられていった。各種照明(地明かり・フロントなど)の説明が行われた後、装置と人物にあてる照明が作られた。その際、光量や色を変化させ、また仕込みを追加する(装置に手をいれた状態で)と、どのように見えるようになるのか、講師の説明をまじえてわかりやすく解説された。



音響では、8台のスピーカーが準備され、実際に音を出しながら、劇中の音をどのスピーカーから出すとどのように聞こえるのか、またスピーカーを組み合わせるとどのように変化していくかが詳しく説明された。そして、ここではどのような「音像」をイメージするかが大切であることが強調された。

照明と音響が入った本番を行う

ここまでで作成した照明と音響を入れた本番を行い、無音・地明かりのみの素通しからどのように変化したのかを確認した。

講師5人の先生方による対談

舞台技術の点から、劇場に入らないと照明作成は難しいが、音響は自由度が高く事前に調整が可能であるということ等が紹介された。

最後に、装置の説明がなされた。装置作成の過程においては、模型を作ることの重要性が強調された。今回の装置は段ボールで作成されていて、「破って、もんで、広げて接着剤で貼る」という過程をへて作られたものであった。そして、装置を作成していく中で、「素材感」「質感」の統一が重要であることが話された。

(文責 山口県立下関西高等学校 中林 英二)

第4分科会

舞台衣裳

衣裳は語る

講師 加納 豊美

「衣服？衣裳？」

「今、あなたが着ているのは衣服？衣裳？」「なぜ舞台衣服とは言わないの？」「衣服と衣裳の違いは何？」これらの根源的で本質的な加納先生の問いから、分科会は始まった。出席者の多くは、これまで考えたこともなかった問いにはじめは戸惑っていたが、問いを考えることで、衣裳の果たす役割が見えてくるという加納先生のお話のもと、それぞれが必死に答えを導き出そうとしていた。様々な意見の中から加納先生が集約された答えは、「明確な目的があって、意図的に作意を持って選択されるもの」こそが「衣裳」であるということ。さらに、「着る」ことによってどのような作用があるか、どのような印象を与えるかについて、私たちは経験から知っているということであった。

「衣裳」を考えるときに大切なこと

とにかく台本を「読み倒す」こと。この台本を通して何が伝えたいのか、時代背景、時間の経過など、参考資料をもとに調べることが大切である。さらに、香盤表を(Qシート)を作ることで、全体の流れが見えてくる。台詞の中の気になる言葉や、演出家の役者に対するダメ出しなども書き加える。稽古には必ず参加し、演出家とイメージをすり合わせることも重要。事前にイメージ画を描き、打ち合わせをするとよい。ときには衣裳担当から演出家にプレゼンテーションをすることもある。リハーサル時には、必ず舞台全体を引きで見、劇場の大きさ、照明のあたりなどを鑑み、問題点を解消していく。



衣裳には、与えたい情報を与える効果がある一方で、与えたくない、与えてはいけない情報もはらんでいる。また、衣裳が時代を表すことはできるが、その時代を表す役目自体を衣裳が担っているわけではないので、「必然性」が重要である。舞台は総合芸術であり、役者、演出、スタッフ、その他舞台に関わるすべての人たちと協力して、話し合いながら仕事を進めていくことも肝要であるとのことであった。

実践例紹介

衣裳の本質をつく講義のあとは、加納先生が実際にお仕事をされた際に使われた香盤表や、原画デザイン、舞台の写真などを見せて頂いた。最初は作意的に黄色をキーカラーとしていたものが、最後は全員黒の衣裳をまとっていたり、靴下の裏が全員赤、ストッキングを着て中に詰め物をしたりしているなど、どれもユニークで「衣裳が語る」、という感覚を参加者全員で体感させて頂き、分科会は終了した。

(文責 山口県立下関中等教育学校 衛藤 恵)

第5分科会

部活動

より充実した演劇部の活動のために

講師 米永 道裕／安保 健／井口 守

講師の先生方をご紹介した後、事前アンケートで特に質問の多かったものについて、ご助言をいただいた。

Q 発声練習の方法や時間をどうしたらいいか？

- A 練習時間に合わせて調節。1時間程。体を温めてからやる。響く声を心がける。大声を出そうとして喉に負担をかけない。母音だけで読む。体を動かしながらのうしろ売りは有効。録画・録音も有効。
- Q 脚本を選ぶ際、どういう基準で選ぶとよいか？
- A 読んで頭の中で舞台が動いていく脚本はよい。観客の為に選ぶ。ネット脚本は要注意。古典的な評価の高い本を3本くらい読む。顧問等に相談してやりたい本を入手する。演じたDVDを見るのも時には有効。
- Q 練習に来ない部員をどうすればよいか？
- A キャストが来ない時は別の人にやらせる。余裕があれば予め代役を立てておく。スタッフが暇なら役割を与える。大会や講習会で演劇に「ハマる」体験をさせる。芝居ができた中で台本持って演じさせるのも手。
- Q キャストとスタッフとの壁を解消するにはどうすればいいか？
- A キャストにスタッフの仕事をやらせる。スタッフワークの日を作るのもよい。
- Q ハグのシーンがうまくいかない。どうすればいいか？
- A 本当にハグが必要かまず考える。本当に必要ならできるはず。ぬいぐるみなどで練習する。本人達は恥ずかしがらず、周囲も真剣な雰囲気を作る。2人間の壁を取り除けるまで何度も繰り返す。
- Q 顧問との関係をどうすればいいか？
- A 演劇に興味のない顧問はしつこく誘ってコメントしてもらうなどして取り込む。顧問の意見が違ふと感じた時ははっきり言っていい。互いの意見を尊重し合う事が重要。色々な教員に見てもらうのも有効。
- Q 大人数の部員をまとめるにはどうしたらいいか？
- A 各部署ごとにチーフ・サブチーフを置き、機能させる。5人1組で寸劇やコントをさせる。
- Q 部員間の意識の差をどうやって埋めるか？
- A 体のふれあいを伴うワークショップをやる。自分たちの舞台にプライドと責任を持つ。
その他、役者の声質が似ている時は速さや強弱を変える、部員獲得には「演劇部は楽しい」と思わせるのが大切、周りが下手と思っている部員には互いを認め合うことの大切さを伝える、等の助言をいただいた。
- (文責 山口県立宇部高等学校 新竹 伸芳)



第6分科会

生徒講評委員会

生徒講評委員会合評会 講評委員の目で見たと上演作品

合評会では、生徒講評委員による司会進行のもと、講評委員から講評委員会が出された上演作品に対する討議の内容、講評が紹介された。それをもとに作品や芝居創りについて、上演校や観客の演劇部員・顧問を交えて活発な質疑応答がなされた。

①「そらふね」(広島 沼田高校)

戦争が終わった後も被爆者に対する差別があったことを風化させてはいけないと、改めて強く考えさせてくれた劇であった。作品をつくりあげる過程で、原爆を題材にするにあたり、部内でどのような話し合いをしたのか、自分たちの知らない時代の話を、どのように学んで上演に至ったのかなどについての質疑応答があった。

②「アメイジング・グレイス」(青森 青森中央高校)

立場が変わることで正義の定義も変わる人間の身勝手さ、歴史を正しく学び、伝えるとはどういうことなのかと考えさせられる劇であった。また、スクールカーストの様相と重なり、人間の醜さを感じた。身体しかなかった上演に向けてどのような練習をしたのか、調べ学習に関しての質疑応答があった。

③「幕が上がらない」(静岡 伊東高校)

幕を上げず、客席を舞台にする斬新な演出方法により、観客を作品の中に引き込み、まるで劇の世界に

いるように感じさせられる劇であった。また、型破りでもいいのではないかと勇気づけられた。台本創りのきっかけや客席での上演のねらい、日常生活との関係についてなどの質疑応答があった。

④「常呂から TOKORO curler」(北海道 北見北斗高校)

父への不満と進路への悩みから気まづくなった父子関係が、母親の存在によって自然と通じ合う姿に家族の絆、家族の存在の大きさを改めて実感した劇であった。また、講評委員では男子は父に、女子は娘に共感した。BGMの選曲や舞台装置の設置や転換などについて質疑応答があった。

⑤「八月の青い蝶」(広島 舟入高校)

原爆をあえて語りたくない人も大勢いるのではと考えさせられる劇であった。亮輔の愛情が純粹さから独り占めの重たさによって思えてきた。シルエットや映し出された蝶の細やかさ、衣装なども含めスタッフワークも印象的であった。原爆劇に取り組み続けることや原作のカットの仕方についての質疑応答があった。

⑥「Is(あいす)」(岐阜県 岐阜農林高校)

高校生の私達にとって、日々の学習のことと部活動、親子の関係など共感できる部分が多い劇であった。リアルなバスケットボールやゴールネットの動き、音響なども効果的で引き込まれていった。タイトルの「Is」の意味もいろいろと考えさせられたが、受け取った観客自身が納得すればよいのではないかという質疑応答があった。

⑦「その時を」(北海道 清水高校)

主人公たちの日常から、今しかない「その時を」大切に生きなければならぬと感じさせられた劇であった。仲間を大切にしたい、尻込みをしないで前を向きたいという意見もあり、青春は二度と戻ってこないということがしっかり伝わった作品であった。場面作りや雰囲気作りの過程などについての質疑応答があった。



⑧「ボクの宿題」(佐賀県 佐賀東高校)

子に対する親の思いの大きさや家族って何だろうと深く考えさせらる劇であった。泣いている人も多かった。パワフルで繊細な劇で、感動するポイントも人それぞれであった。セリフや歌がしっかり伝わってきたことから、発声方法や歌についてや、劇中のバラの花などについての質疑応答があった。

⑨「解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話」(埼玉県 芸術総合高校)

どれだけ美しいものでも忘れ去られるということから、自分の生きる意味を考えさせられた劇であった。木製の椅子、衣装、照明なども美しく芸術的な芝居であるとの印象であった。登場人物の名前や、なぜこの劇を選んだのか、女子生徒ならではの演出・感受性などについての質疑応答があった。

⑩「2016」(徳島県 阿波高校)

現在と過去の対比の中から、過去に比べ間接的にしか関わらなくなっている私達の姿に疑問を覚え、科学の発展は良いことばかりではないと考えさせられた劇であった。現在からまた未来を想像していかないといけないというメッセージを感じたことや、舞台となった1986年の社会の様子などについての質疑応答があった。

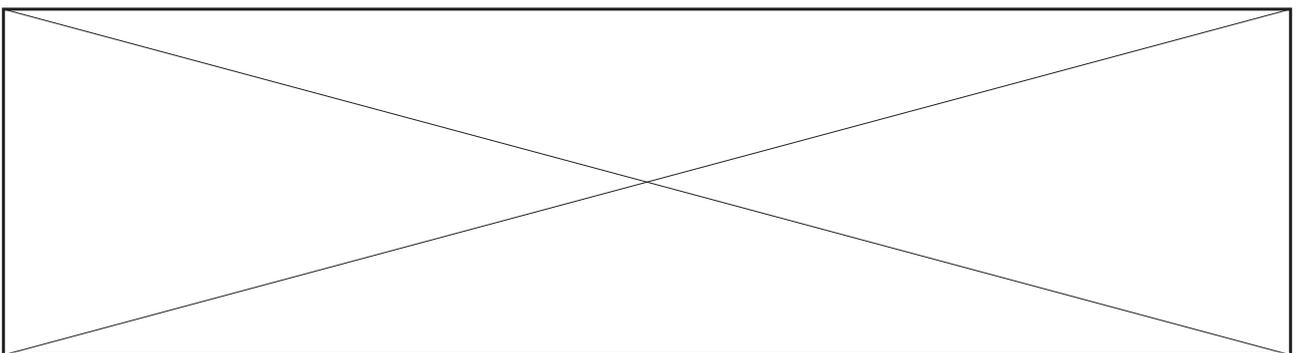
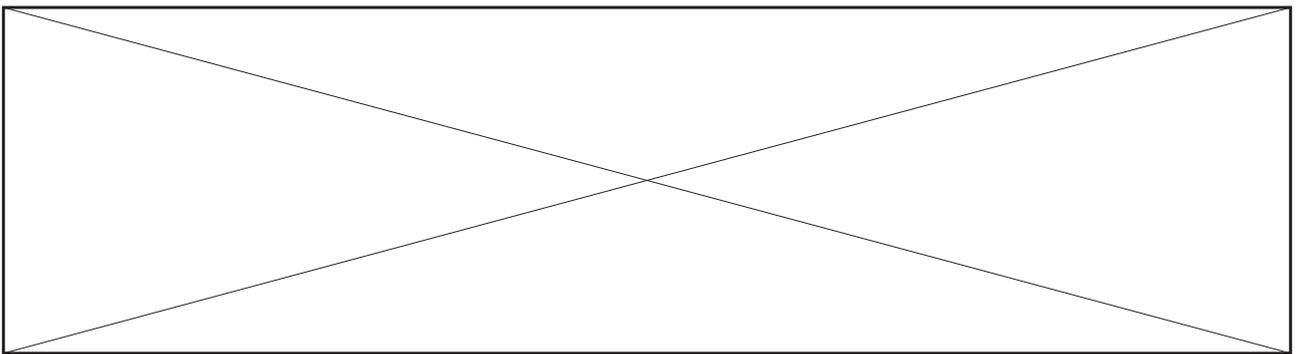
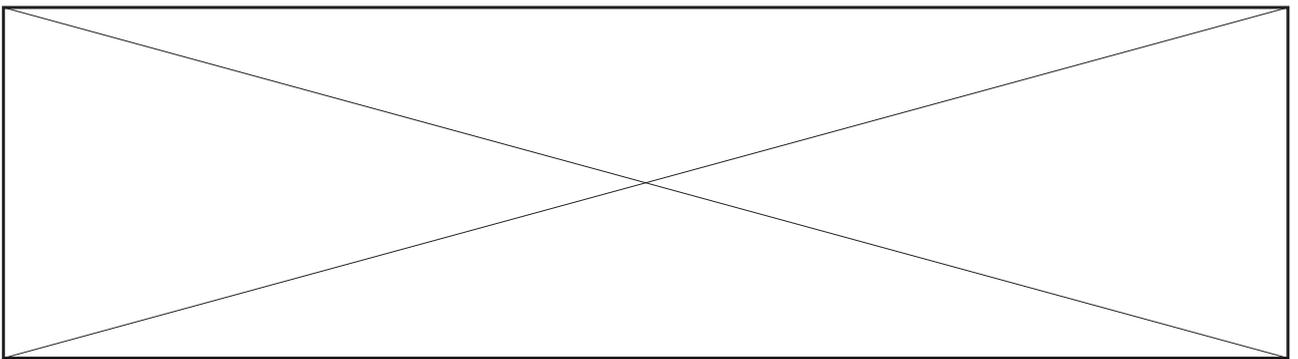
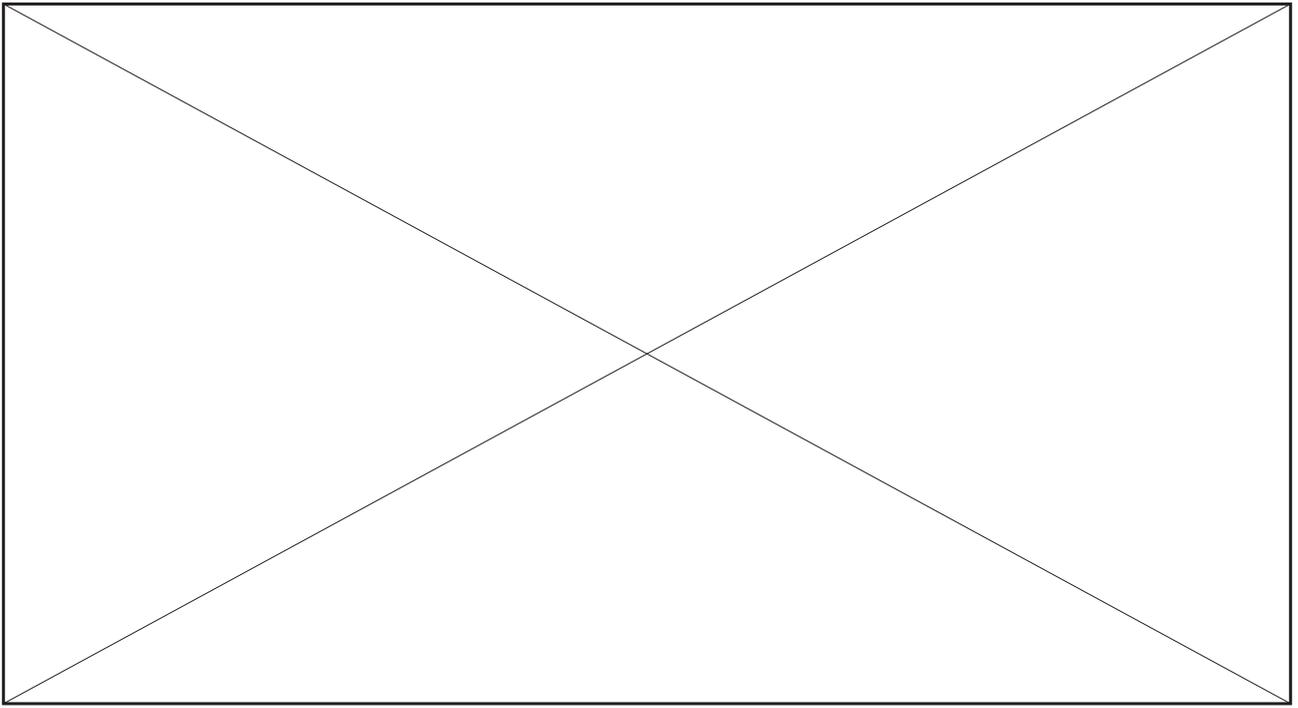
⑪「扉はひらく」(和歌山県 串本古座高校)

対人関係に悩む二人の登場人物それぞれに共感でき、本当の親友とは何かと考えさせられる劇であった。変わろうと思ってもなかなか変わらない現実も感じられた。エチュードで作りあげられた作品で、作りあげていく過程や稽古についてや役者本人の現実の性格と役の性格との関係性などについての質疑応答があった。

⑫「双眼鏡」(山梨県 白根高校)

照明と舞台が印象的で、客電が消えきらなかったことで同じ空間を共有でき、劇に引き込まれていき、少女の様々な葛藤や苦しみ伝わってきた劇であった。人間が物差しを持ち、一人ひとりに基準があり、「普通」は決められないという意見やブロックの形が劇中の登場人物にあてはめられている気がしたなどの意見交換があった。

(文責 広島県 清水ヶ丘高校 岡田隆一)



事務局通信

71回目の原爆忌を前に世界的に注目を浴びた広島で開催される第62回広島大会を前に、今年度第2回常任理事会・理事会が行われました。

2015年度事業報告、決算報告及び会計監査報告が承認され、続けて2016年度事業計画案、予算案が承認されました。次年度第1回常任理事会・理事会の開催時期について、春季高等学校演劇研究発表大会の日程に合わせてどうか、という点についても提案がなされました。従来、年度初めの全国大会上演校打ち合わせと並行して行われていた会議について、理事会出席者の低迷、3月、4月と連続する大会関係派遣の負担軽減、同年度内の開催により、理事が年度をまたがずに出席できる点等が理由として挙げられました。一方で、理事の出席数低迷の理由分析が十分でないこと、春季大会と同日程による開催地サイドの運営、調整に係る負担、出場校打ち合わせの運営と全国大会運営の連動性が確保できない等のデメリットも指摘されました。次回の岐阜大会で試行し、次年度以降方向性を確認することとなりました。

著作権ガイドラインの修正については、今回の理事会に向けて、4月に示した全国事務局提案を基本に各都道府県で協議いただきました。概ね事務局提案（改定案では「2」案）

に賛同する都道府県が多かったですが、文言については、曖昧性を回避することが必要である点、強制力を過剰に持つことの危惧する点等が指摘され、再度事務局で修正を検討することといたしました。

今後よりよい創作活動を保証する意味で、考えていく必要がある内容です。

春季大会については、10回の節目を迎え、今後どのような方向性で運営していくか、報告がありました。上演校のことを考慮し年度内開催をひとつの要素としてとらえてスタートした大会ですが、回を重ねるごとに夏の全国大会と違う側面、例えばコンクール形式によらないため上演校の作りたい舞台をじっくり作れること、全国大会レベルの学校の上演機会が増えたこと等のメリットが出てきました。一方で開催地についても少し各ブロックの中で振っていき必要があること、生徒講習、講習会等と組み合わせたい大会にしていこうこと等が今後の課題として挙げられました。

広島大会では、舞台芸術を中心とした芝居作りの実践や舞台衣裳についての分科会が設定され、さまざまな面から演劇をとらえる機会となりました。今後も開催地の実情に合わせて、分科会の内容について協議していきたいと考えます。次年度の宮城大会も、素晴らしい大会となるよう、力を合わせていきたいものです。（事務局・三上 実）

2015年度 全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
基本収入	会費	2,140,000	2,132,000	1,000円×2132校分
その他の収入	活動報告広告	400,000	745,000	「活動報告集」広告掲載料
	寄付金	130,000	110,000	「演劇創造」広告掲載料等
	高文連より	300,000	279,700	高文連より活動補助・旅費
	利息	500	679	三井住友銀行
繰越金	前年度より	2,234,083	2,234,083	
民間支援	支援金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院
	協賛金	1,424,000	1,424,000	NHK・四国学院・東京フィルム・桐朋芸術
合計		9,628,583	9,925,462	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
管理費	旅費・交通費	1,800,000	1,669,340	滋賀、伊達、広島、近距離旅費等
	役員派遣費	250,000	261,320	会長、事務局長旅費
	会議費	80,000	80,000	常任理事会費用
	通信費	150,000	141,999	切手・ファクス・送料・HP維持費等
	印刷費	150,000	85,860	名簿・賞状
	消耗品費	15,000	15,722	文具・タックシール・名刺等
	事務局維持費	70,000	70,000	行動費
	記録費	15,000	20,000	全国大会上演脚本
	雑費	20,000	27,902	謝礼・差入れ等
	事業費	会誌発行	900,000	835,920
渉外費	ブロック連絡費	10,000	6,912	各ブロックへの振込費用
	活動報告集	900,000	896,400	活動報告
大会運営費	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院ブロック補助(25万×8)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(広島県)
予備費	春季研究大会	300,000	300,000	特別会計へ
		2,418,583		
合計		9,628,583	6,980,825	

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合計		1,945,263	1,945,263	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
大会運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助(30,000×10校)
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	645,263		
合計		1,945,263	1,300,000	

2016年度 全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
基本収入	会費	2,132,000	2,100,000	1,000円×2100校
その他の収入	活動報告広告	745,000	500,000	「活動報告集」広告費
	寄付金	110,000	100,000	「演劇創造」広告費
	高文連より	279,700	300,000	役員旅費・運営費
	利息	679	500	
繰越金	前年度より	2,234,083	2,944,637	前年度繰越金
民間支援	支援金	3,000,000	3,000,000	日本工学院
	協賛金	1,424,000	1,424,000	四国学院・東京フィルム・桐朋学園・NHK
合計		9,925,462	10,369,137	
支出の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
管理費	旅費・交通費	1,669,340	2,000,000	広島、仙台、大垣、事務局会議旅費等
	役員派遣費	261,320	300,000	役員派遣
	会議費	80,000	80,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	141,999	150,000	切手、送料、ファクス等
	印刷費	85,860	150,000	名簿、賞状、封筒等
	消耗品費	15,722	20,000	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	27,902	30,000	謝礼等
	事業費	会誌発行	835,920	950,000
渉外費	ブロック連絡費	6,912	10,000	各ブロックへの振込費用等
	活動報告発行	896,400	900,000	各都道府県活動報告集
大会運営費	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援金(宮城県、千葉県5万円)
予備費	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ
		2,944,637	2,789,137	
合計		9,925,462	10,369,137	

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合計		1,945,263	1,945,263	
支出の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	645,263		
合計		1,945,263	1,945,263	

「お知らせ」今年も第62回大会が、無事広島で地で開催することができました。これもひとえに現地の先生方や生徒のみならず、はじめとするスタッフのみならずの尽力があつてのことだと思ひます。

大会と並行しておこなわれた理事会では、2015年度決算報告と2016年度予算案が審議され、可決承認されました。

私たちの日頃の活動を支えて下さっているのは、民間支援団体の皆様の協力があつてのことです。特別協賛団体の東京工科大学、日本工学院をはじめ協賛団体の四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学、多摩美術大学、東京フィルムセンター映画・俳優専門学校などの各支援団体様に心から感謝を申しあげます。

第11回春季全国高等学校演劇研究大会は、2017年3月18日(土)～20日(月)岐阜県大垣市の大垣市民会館でおこなわれます。ぜひ、足をお運びください。なお、上演校や時間などの詳しい情報は、わかり次第、全国高等学校演劇協議会のホームページに情報を掲載していく予定です。